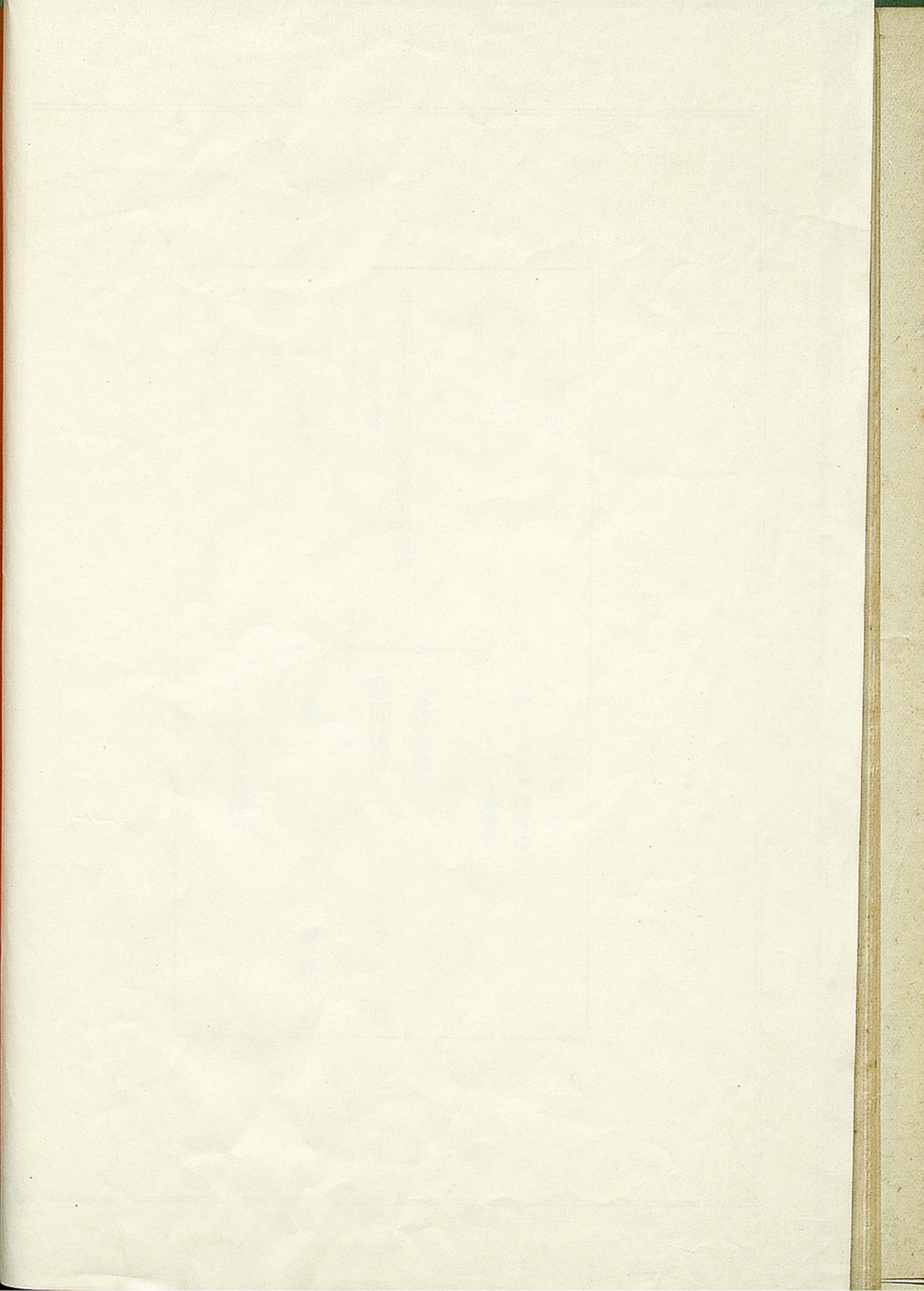


# 求道

第七卷  
第三號



求道第七卷第三號目次

求道

◎惟佛是真

自督

◎讚岐所感

講話

◎廻向と慚愧

聖傳

◎チャーターカ釋尊傳

久遠劫の昔

讚仰

◎蓮如上人の御文

五帖目第一通

和田龍造

近角常觀

◎今は唯本願の綱にすがるばかり

生沼さく子

告白

時報

◎讚岐傳道

毎日曜午前九時

求道學舎

(本郷森川町一番地)

毎土曜午后二時

第一 求道會

(九段坂佛教俱樂部)

毎月二日午后七時

第三 求道會

(日本橋堀越町説教所)

求道

第七卷 第三號

惟佛是真

聖德皇太子の遺訓に曰く、世間虚假、惟佛是真と。歎異鈔に曰く、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますと。前聖後聖其揆を一にして不思議にも符節を合せたるが如くである。且つ念佛成佛是真宗とある法照禪師の言と全く一致する。是實に真宗と名づけたまひし淵源にして、親鸞聖人の御精神ともいふべきは此真の一字である。聖人立教開宗の聖典教行信證の各卷に、冠するに顯淨土眞實としてある。今上天皇勅して見眞大師と諡したまひしも洵に畏きことである。

親鸞聖人は法然聖人を以て眞の善知識と仰き、信心の行者を以て眞の佛弟子と呼びたまふ。他力の信心を以て金剛の眞信と名づけ、來生の開覺を以て淨土の眞證と嘆じたまふ。徹頭徹尾眞の一を以て終始してある。其眞とは畢竟惟佛是真で

ある、佛が即ち眞である、其佛の眞の塊が即ち念佛である、夫故念佛成佛是真宗である、故に眞宗の眞たる所以は結局この佛のみ眞にてましますと知らしていただくばかりである。然るに此事は言ふに安くして實際に於ては其眞を實驗せねば解らぬ、さればとて實驗せねばならぬと我心に力を入れて佛の眞が分かるものではない、唯々佛の眞の御力が我々の心に徹到した一念が信心である。和讃に眞心徹到するひとは、金剛心なりければ、三品の懺悔するひとく、ひとしと宗師はのべたまふとあるが是である、實に此眞心徹到が肝腎である。先づ聖德太子の遺訓にも世間虚假惟佛是真とある、即ち世間の一切が虚假である、しからば何が眞實であるかと云へば唯佛のみ是れ眞である。吾人は人生の常、樂、我、淨をたのみにして、日夜醉生夢死して居るのである、然れども、事毎に虚假の眞相を實現して無常、苦、無我、空の有様が着々として身に迫るのである。されど苦、空、無常、無我が、單に我等が苦痛煩悶の聲として叫ばれて居る間は未だ眞が見出されて居ないのである、夢に夢と知りながら苦んで居るのは猶夢と分らないのである、苦、空、無常、無我に苦んで居るのは眞の苦空無常無我が分らないのである。此の如く人生の無

常に悲み我身の罪惡に泣きつゝあるは、未だ常住の或物を見出し、罪惡を救済したまふ慈悲を知らぬからである。然るに此の如き罪惡無常の我等人生に對して慈悲哀愍の御心を以て觀そなはしたまふ如來常住の光が眞である、其やるせなき親心が本願である、其親心より呼び出されたる聲が念佛である。歡異鈔に、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますと仰せられたが實に此點である。實に此、たゞ念佛のみぞまことにておはしますと如來のまことがいたゞかれたとき、眞に火宅無常とあきらめがついたのである、煩惱具足と自覺されたのである、そらごと、たはごと、まことあることなしと、今まで攪みて放すことの出来なんだ人生を放すことが出来るやうになつたのである、虚假の世間が虚假と分かつたのである、唯人生まことは佛ばかりであるといたゞけたのである、惟佛是眞、人生絶對常住の大悲の光明を以て照したまふことが分かつたのである。

此如來常住の境界が眞の常樂我淨である、是涅槃の四徳である。言は同じ常樂我淨であるが、前に擧げたる世間の常樂我淨は凡夫の迷妄にして四顛倒と名づけらるゝものである、

樂我淨の極樂無爲涅槃界に入るへき身となるのである、これ信心歡喜である、至心廻向である、即得往生である、有漏の穢身はかはらねど、こゝろは淨生にすみあそぶのである。

此の如く我等は如來他力の御恵によりて一念發起の時既に涅槃の一分を味ふことが出来るのである、能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃とあるが是である、此苦空無常無我の人生にありながら、涅槃の常樂我淨を待ち設けて樂まされていたゞくことが出来るやうになつたのである、こゝで凡夫の常樂我淨が、いかに顛倒の妄見であることを知らせていたゞくことが出来たのである、そこで、我身は現に是れ罪惡生死の凡夫と覺悟をさして貰へたのである。凡夫の常樂我淨の四顛倒を悟了して涅槃の常樂我淨の四徳を仰ぐことの出来たのは大乘の大乗たる點である、凡夫は苦、空、無常、無我と合點しながら、未だ涅槃の常樂我淨を仰ぐことが出来ぬものゆへに凡夫の常樂我淨を放すことが出来ず、從て眞に苦、空、無常、無我と覺悟せんと苦しみなから覺悟出来ぬが小乗と貶せらるゝ點である。今他力信仰は如來の發願廻向によりて信樂開發の一念に此大乘無上の至極を顯はし、信心歡喜の妙境に入らせていたゞくのである、是初歡喜地の菩薩と名づけらるゝ譯

今云ふ涅槃の四徳たる常樂我淨は絶對の佛境界に於て實現さるゝ悟淨の眞相である、他力信仰に於ては眞に此境に入るの、は即ち淨土に往生して、極樂無爲涅槃界に入りた時である、安養淨土の大利佛願難思の至徳である。されど此境に到り得ると得ざるは現在人生に於て此如來常住の光明に接觸して絶對の大悲を見出すと否とによるのである。相對的の人生に生存する我等は形體の存せんかぎり我等が絶對の佛陀たるあたはざれども、絶對佛陀の光明に觸ることが出来るのである、否相對的の我等の永久に相對を脱する期のあるべからざるを憐みたまひて、絶對夫自身の境界より御名を示し、光を放ちて相對の我等を呼び掛けたまふ、是が如來の廻向である、如來の發願である、如來の作願である、如來の本願である、本願招喚の勅命である、十切正覺の如來である。此如來本願の勅命が我等に聞えた一念が如來の廻向にあつたのである、攝取の光明に接したのである。如來の作願をたゞぬれば、苦惱の有情をすてずして、廻向を首としたまひて、大悲心をは成就せり。十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば、阿彌陀となづけたてまつる。此廻向にあづかり、此光明に觸れたるときは身心悅豫を以て満たされて、常

である、順次生に法性常樂の眞證に入るべきものとなつたのである、是補處の彌勒と同じと名づけらるゝ點である、これ眞の佛弟子と名づけられ眞の菩薩と呼べるゝ所以である。

倍信仰問題に於て大に我等の注意せねばならぬとがある。動もするば前に擧げたる凡夫の常樂我淨の四顛倒を攪みながら、之を以て眞に涅槃の常樂我淨であると思はんと企て、居ることがある、是れ畢竟、同じ常樂我淨であるが爲に迷悟染淨全く正反對であることに氣が附かぬのである。殊に近時青年の人生觀、世界觀に於て眞の信仰に達せざるの限りは滔々として皆此誤謬に陥りて居る、そは人生如是の眞相を以て如來の恩寵であるといふことである、此言は人生の迷の常樂、我、淨を以て如來の賜であるかの如く思ふて、感謝の意を起すとが信念である様に思ふのである。しかるに眞の佛の恵がいたゞけた上からは、苦空無常無我の人生に佛ばかりは常住の光であることを自覺し、猶其煩惱具足、火宅無常の人生中に如來常樂の恵の満ちつゝあることを中心より満足して感謝することが出来るれども、單に迷の常樂我淨を以て直に如來の恩寵であると思はねばならぬ、感謝せねばならぬと企てながら、思ふことが出来ず感謝することが出来ず苦んで居るのである。夫

△△△△△△の一面には人生は苦空無常無我であると言ひながら徒△△△△△△に其苦に泣き無常に惱むばかりにして、思ひされぬ、覺悟出△△△△△△來ぬ有様である。昔より信仰問題に於て改悔文のもろくの雜行雜修自力のころをふりすてゝとあるこのふりすてるといふ語が氣にかゝるが此思ひ切りの附きてない證據である、又、われらが今度の一大事の後生御たすけ給へとたのみ申して候とあるたのむとある語が氣になるのは眞の恵がいたゞけてない證據である。

信仰の一面は絶対に思ひきりが附きてあらねばならぬ、他の一面には絶対に恵がいたゞけてあらねばならぬ、このならぬいふ言語が人を驅りて自力に走らしむる處がある。さればとて徒にすてずとも可い、たのまずとも可いといふは大誤りである、すてねばならぬ、思はねばならぬと思ふならば夫も大誤りである、如來のやるせなき常住の光に接し、大悲招喚の聲を聞くときは、自づから人生の無常を悟り、我身の罪惡を自覺して此世が思ひ切れ、我身のあさましきことが氣にかゝらぬやうになるのである、すてねばならぬと力むのではない、すてずには居らぬのである、思ひ切らねばならぬといふのではない、自づから思ひ切られるのである、思ひ切りが附かぬ

ぐる惡なきがゆへにてある、さればこそ人生の善惡が目につかぬやうになつたのである。聖人のあはせには善惡の二つ總してもて存知せざるなり、そのゆへは如來の御ころによしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそあしさをしりたるにてもあらめと、煩惱具足の凡火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておほしきものである、是即聖德太子の我必ずしも聖に非ず、人必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみである。かくて仰ぐ所は惟佛是眞である、念佛成佛是眞宗である。南無阿彌陀佛。

凡夫の身に於て佛になると云ふ程むづかしいことは無きに、何にも入らず頼む一念にてお助けぞと聞き、初めから唯易く助かることの様計り思つて居る。これは聴聞のたらしめ、成る程と本願を信ずる時は、如何なる悪人でも心易く御助けぞと信ぜればならぬ。されどもどうしても助からぬ筈のもの、易く御助けぞと信ぜられたのでなければならぬに依りて、一念の信心には機法二種の深信といふが具して、無有出離之縁と助るたよりのつき果てたものを御助けぞと信じたのでなければならぬ。それをば唯易く御助けと云ふことのみを聞き置いて、易いと計り思ふたのでは、實の信てはなきなり

《香月院語録》

ばならぬのである。其思ひ切りがついた一面が即ち唯如來の眞ばかりである、如來の恵ばかりである、此の如き我等人生に對して、矜哀悲憫のやるせなき彌陀大悲の撰擇願心の觀そなはし、知ろしめすばかりである。我等は此佛の方よりふりがゝり来る廻向の恵に遇ふて身心満足の有様が信心歡喜である、是實に善もほしからず、惡も恐れなしの境である。

此善もほしからずといふが満足した有様である、惡もあわれなしといふが我身の惡しきが氣にならぬやうになつたのである、善のほしからざるは本願にまされる善なきがゆへに、惡のあそれなきは、本願をさまたぐる惡なきが故に、如來の清淨眞實に満足して雜毒雜善の羨ましからぬやうになつたのである、罪惡煩惱の濁水へたてなくなつたのである。行卷に此意を以て一乘海を釋したまひてある、曰く、海と言ふは久遠より已來凡聖所修の雜修雜善の川水を轉じ、逆訪闢提恒沙無明の海水を轉じ、本願大悲智慧眞實恒沙萬德の大寶海水と成す、之を海の如しと喩ふる也、良に知んぬ、經に説て、煩惱の水解けて功德の水と成るが如しと、この如來の眞實智慧慈悲のまこと一つをいたゞけば他の善も要にあらず、本願にまざるべき善なきがゆへに、惡をもあそるべからず、彌陀の本願をさまた

自  
督

讚岐所感

○讚岐國は實に不可思議なる我が有縁の地である、今より五年前より毎年々々佛教研究會の催により、高松を中心として繙素の別なく、宗派の別なく、有縁の人々が集りて下されて同信の御同朋を以て満たされてある、郡方の人々は一週間旅宿に泊り、親類に寓し、中には家を借り一家擧て聽講せらるゝといふ有様であつた、考へれば從來講じたる講本及講題は、歎異鈔、釋尊傳、三信釋、人生と信仰、二門偈、十七憲法、唯信鈔、唯信鈔文意等であつた、全國に於て五年間連續して有縁の土地が三箇所である、信州の飯山と當地と會津若松とである、懺悔録でも、親鸞聖人の信仰でも、人生と信仰でも出版されたるものは多くは飯山の講話であつたが、亦同時に當地にても話したものである、其他近時味はして貰ふた聖教の深趣及び信仰上の問題は當地に於て話さぬことはない、實に宿縁深厚、恩德無窮の地である。

○今年も亦例により往くべき因縁の熟せんとしつゝある時、今回我が法主臺下が第二期駐錫地の範圍として讃岐へ御巡化になるにつき紀念講話をなすべく當地に来ることになつた、從來信仰上の問題につき腹藏なく話しつゝある地に來りて我が有縁の善知識より如何に私が信仰上の示教を及けつゝあるかを告白して、臺下御巡化の本意を明らかにすることになつた、實に益々不可思議の因縁である。

○恰も四日は我が郷里長濱別院に於て是亦第二期駐錫地として御巡化せられた、乃ち三日日曜の晩東京を出立して、四日朝米原にて御迎をなし、部下僧侶の一人として謹みて御親教を拜聴した、何分にも全國に涉りての事なれば、我が門末中に信心未定のものありては聖人に對して濟まぬことゆへ特に僧分の人は予を補佐すると思ふて各々其受持門徒を教化せられたいと御語をきき、我郷里の門徒の事を思ふて實に慚愧に堪へなんだ、五日朝高松に着するためには六時米原急行に乘らねば間に合はぬゆへ遺憾ながら御暇して米原に往きたるに、亦臺下も同じ列車に召さるゝことゝなつて、再び車中御目かゝりて種々の御示教を受け、又讃岐は法然聖人御流罪地なればとて、特に昔を偲ぶべく持來たせし、親鸞聖人が手づ

篤なる示教に接し徳化に浴するに於てをや、慈光はるかにかふらしめ、ひかりのいたるところには、法喜をうとそのへたまふ、大安慰を歸命せよ。

○特に讃岐に於て我等をして深く感ぜしむるものは法然聖人の御流罪の地たることである、一昨年は丸尾、鹽田兄弟諸氏と共に鹽飽島の御舊跡に參詣した、昨年は小松氏の案内にて佛生山法然寺に參詣した、特に水鏡の御影と名くる聖人の御自書を拜した、讀文は聖人御附屬の御文と同様である、若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取不覺、彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生の御文である、聖人が法然聖人に遇ひなされた御喜びが偲ばるゝ、諸佛方便ときいたたり、源空ひじりとしめしつゝ、無上の信心おしへてぞ、涅槃のかどをばひらきける、眞の知識にあふことは、かたきがなかになをかたし、流轉輪廻のきはなきは、疑情さのほりにしくぞなきと、この眞の知識が歎異鈔に所謂親鸞におきてはたゞ念佛して、彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとの、仰せをかうよりて信するほかに別の仔細なきなりとあるよきひとである、あゝ我等が有縁の善知識がこのよきひとである、聖人は如來の御代官である、善知識は

から法然聖人の傳記及び御説法を書き集めたまへる西方指南鈔を御覽に入れたてまつた、此書中には覺如上人の執持鈔や拾遺古德傳にある語が散見してある所を以て見れば、たしかに覺如上人は御覽になつたらしい、昨年春高田本山にて御眞筆を拜見申したことなど御話申しつゝある間に、汽車は京都について御分れ申した。

○本願力にあひぬれば、むなくすくるひとぞなき、功德の寶海みち／＼て、煩惱の濁水へだてなし、臺下に御目にかゝりたときはいつも此感を爲さぬことはない、一目遇ひたてまつれば十二分に満足せしめらるゝ、色々申したいとか、承りたいとか思ふて居るが忽に満足せしめられて亦十分に意を盡さしめらるゝ、實に遇ふて空しく過ぐるものなしてある、善知識にあふことゝ、おしふることもまたかたし、よくきくこともかたければ、信ずる事もなほかたし、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。○五日朝高松に着てより五日間郡部所々に講話が開かれた、何れの寺にも信仰的に準備をして、心を開きて御教化を待受くる態度が如何にも貴い、四國へは臺下初めての御巡化である、季候は恰も春光和融の時である、土地は到る處青松綠翠である、人民は穩和親切である、況んや臺下諄々としての懇

聖人の御名代である。

○考へ來れば何事も我身につたまされて難有い、我親が嘗ていたゞきたる善知識の御教化に、夫人世のはかなきことは風前の燈水上の泡の如し、ゆめ／＼油斷すべからず、故に淨土眞宗の勸化は平生業成の信の一念にて往生の得否は定るものなり、是皆彌陀他力本願の強縁にもようさるゝことゝころうべきなりと、是親が一代喜びて臨終まで頂かして貰ふた親譲りの衆生稱念必得往生の御附屬の御文と喜ばしていたゞく。○執持鈔に曰く、平生のとき期するところの約束もしたがはゝ往生ののぞみむなしかるべし、しかれば平生の一念によりて往生の得否は定るものなり、平生の時不定のおもひに住せばかなふべからず、平生のとき善知識のことはのしたに歸命の一念を發得せばそのときをもて娑婆のおほり臨終とおもふべしと、實に平生のとき善知識の言の下に一念開發するのが、前念命終後念即生である、散る時か浮む時なる蓮かなの御句の通りである、希くは四國の同朋今回善知識の言の下に歸命の一念發得あれがしと念ずるばかりである。

○法然聖人の御舊跡詣てにつきて思ひ起すは一昨年の多度津の丸尾氏、丸龜の鹽田氏兄弟と共に鹽飽島に參詣したときの

事である、夜半船が着きたるとき濱を洗ふ波の音の静かなる處に孤嶺の月影凄凉として茅屋の燈微かなりし有様である、乃ち上陸して旅宿の一夜に聖人御流罪の昔を語り出た、此時にあたりて邊鄙の群衆を化せんこと莫大の利生なりとの仰せがありがたい、又大師聖人もし流刑に處せられたまはずば我亦配所に赴んや、もしわれ配所にもむかはずんは何によりてか邊鄙の群衆を化せん、是猶師教の恩致なりと仰せられた昔が偲ばれる。

○此度五日間の各地の紀念傳導のほかに年々參る佛教研究會の方へ、今年再び來る代りとして二三日御話することにしたので、多度津及び丸龜の各所に開會することになった、そして恰も鹽飽島へ同道をした丸尾鹽田兄弟諸氏の盡力であつて、今現に丸尾氏の弟君の御宅に泊めて貰ふて御親切なる接待を受けつゝ殘燈の下に之を認めつゝある、法然聖人西仁入道の館に入りたまへる時、極樂もかくやあるらんあなとうと、はやまゐらばや南無阿彌陀佛と申された昔が思ひ出さるゝ、是から御内佛に御禮をさして貰ふて一言法話をさして貰ふつもりである、阿彌陀佛といふよりほかは津の國の、なにはのこともあしかりぬべしと一向專修をすゝめたまひし御恩が難有

集の御親筆を拜することが出來たゆへ、聊か其筆意を擬して書き送つてきた、昨年來つたとき、既に落成してあるときしたが、未だ之を見る機会がなかつた、しかるに不思議なる哉、本年は先方より引きよせらるゝ御縁が熟した、即ち先年來建築中の本堂に於て講話をして呉れとの事で、明日は此有縁の靈地にて御話をする筈である。

○嗚呼一週間の讃岐傳道實に至大の恩寵を感謝する次第である、而して回顧すれば今より滿十年前即ち明治三十三年四月十三日は實に横濱より航西の途に上りたる日である、我身を顧みて慚愧に堪へぬ次第である。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

一、前々住上人、善の事を仰られ候。未だ野村殿御坊、その沙汰もなきとき神光蘇をとをり國へ下向の時、興よりおりられ候て、野村殿の方をさして、此のとなりにて佛法がひらけ申べしと申され候し、人々は年よりてかやうのことを申され候など申ければ、終に御坊御建立にて御繁昌候。不思議のこと、仰られ候き。又善は法然の化身なりと、世上に人申つると同仰られ候き。かの往生は八月二十五日にて候。《蓮如上人御一代記附書》

彌い、南無阿彌陀佛。

○讃岐は興正寺派の中心である、隨て從來の信仰的の同朋に同派の人が多いのである、そして今回恰も丸龜に着した時、恰も同派の新法主親下が青年團組織のために縣下巡化中であつた、親下は學習院御修學中求道學舎へ御出て下された不思議の御縁あるものゆへ、早速御伺をした、色々信仰上の御話を拜承をして、亦恰も西方指南鈔のことなどさまゝ申上げた、かねての御親みがあるものゆへ、旅中の邂逅一入御慕はしく感じた、眞面目なる御話に覺えず感動した、親鸞聖人の眞宗は將來各派とも前途に光輝が赫々である、實に諸佛方便ときいたりたのである、南無阿彌陀佛。

○丸龜市外權堀の正宗寺は法然聖人が鹽飽島より上陸された御舊蹟である、聖人が權を以て堀られたるとき清水が涌き出た、其泉が今猶存してある、聖人の御歌に、南無の船阿彌陀の權てほる清水、末の世までも佛々と涌くと詠じたまひたと傳ふるのである、私は度々參詣をしたが、一昨年のことであつた、篤志の信者香川直助といふ人が其門前に一丈有餘の自然石を建て、六字名號と御歌とを彫刻せんとの考て私に其揮毫をせよとの事で、止むを得書くことになつた、幸に選擇

聖人の配所は土佐國とさだめられけれども、讃岐國鹽飽の莊は御領なりければ、月輪の禪定殿下の御沙汰にて竊かにかのころへぞうつしたてまつられける。かの莊の領主駿河守高階時遠入道西仁がたちに寄宿したまふ。御教書のむねなをさりならざれば、なしかはちろそかにしたてまつるべき、さらめきもてなしたてまつる。溫室結構し美膳調味しつゝそのあひだの經營いかにかなとそふるまいける。近國遠郡の上下、傍莊隣郷の男女群集して、世尊のごとくに歸敬したてまつりけり。一向專念なるべきやそをよみたまひける歌

阿彌陀佛といふよりほかはつのくにの  
なにはのことあしかりぬべし

時遠入道西仁とひたてまつりていはく、自力他力といふこといかゞこゝろえはんべるべき。こたへてのたまはく、源空は殿上にまいるべき器量にてはなけれども上よりめせば二度までまいりたりき。これはわがまいるべき式にてはなけれどもかみの御力なり。まして阿彌陀佛の御力にて稱名の願にこたへて引接させたまはんことをなにご不審かあらん。自身のつみちもければ無智なれば、佛もいかにしてかすくひたまはんなどおもはんは、つや／＼佛の願をしらざるひとなり。かゝる罪人をやす／＼とたすけん料におこしたまへる本願の名號をとなへながら、ちりばかりもちかふこゝろあるまじきなり。三三。

# 廻向と慚愧

〔求道學會日曜講話〕

近角常觀

近頃私の大に氣附かして貰うて喜んで居る事は『廻向と慚愧』といふ事でありませう。之が此頃私の考えの中心となつて居る故、今日は此事に就きお話し致さうと思ふのであります。

「廻向と慚愧」といふ事は、廻向は如來の遣る瀧無き御心を私の上に賜はるのが廻向である。如來の親が親の遣る瀧無き親心を我々の上に下さるのが廻向である。又慚愧とは其の親の遣る瀧無き親心に引き比べて如何にも自分が罪深い事をあやまり果てるより外は無い。如何にも自分は罪の深い者である。眞實自分の悪い事に氣が附いて來たのが慚愧である。此の如來の廻向と我々の心の慚愧といふ事が、裏と表と言はうか、右と左と言はうか、一方が有つて一方が缺けるといふ事は無い。片方があれば片方が必ずついて廻るのである。如來の御恩の高い事を知れば知る程自分の罪の深い事を慚愧する外は無いのである。其處の味ひを今日は特に話し致し度いと思ふのであります。殊に此の「廻向と慚愧」といふ言葉は今

蛇蝎奸詐のこゝろにて、自力修善はかなふまじ、  
如來の廻向をたのまては、無慚無愧にてはてぞせん。

蛇の如く蝎の如き虚假偽はりの我が心である。其の人間が自力修善など言ふた處が、出來よう筈が無い。處が其の者が此の度びは如來の御廻向があればこそ、無慚無愧の此の身が救ひに遇はれるのである。此の如來の御廻向無かりせば一代無慚無愧とも罪が深いと氣附かず終る處であつたのが、此の度びは此の御廻向一つで始めて自分の罪の深い事に氣附かせて貰ひ慚愧させて貰ふのであると喜ばなされたのである。此の二首の御和讃が丁度慚愧と廻向が對になつて居るのである。玆の味ひを御話し致し度いと思ふのであります。

之を初めに解り易く申して行くならば、私共は自分が無慚無愧の淺間しき身でありながら、自分は善き者、一つ角取り所のある者のやうに思ひて、我が身知らずに暮して居るのである。處が、此者が遣る瀧無き如來の意を聞けばこそ自分の身の淺間しき事が初めて知らせて貰へるのである。此の罪の深い身に斯る遣る瀧無き御恩を蒙つて、實に我が身程仕合せ者は無いと、如來の御恩を聞けば聞く程我が身の淺間しき事をあやまり果て慚愧の心が起り來るのである。此の頃は兎角同じ事を繰り返す事になります。猶ほ今日も自分が心にひしと感じて居る事に就き話さうと思ひます。夫は今年私の親の丁度七年に當るので、何と無く此の春已來親の御恩を思ひ出し、人に話すにも此の頃は親の御恩の上で話す事が多いのである。

去りながら玆に一言断つて置かねばならぬ事は、此の世の

迄餘り用ひた事の無い言葉であるが、此頃御開山聖人の御聖教を讀む中に、私は此の點に就いて大に氣づかせて貰ふたのである。實は此の一日の淺草本願寺に於ける宗祖降誕會でも此題でお話する積りにして居るのであります。

夫に就き此の廻向と慚愧が丁度對であると言はうか、其處の味ひが御開山聖人の『愚禿悲歎述懐』の御和讃に實に明かに難有く頂かれるのである。此の述懐の御和讃といふのは、聖人が御自身の心中を悲歎述懐して作りなされたものであります。其一首に、

無慚無愧のこの身に、まことのこゝろはなけれども、  
彌陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまふ。

斯ういふ難有い御和讃がある。聖人御自身が心中を告白して如何に御示し下さるかといふに、「無慚無愧の此の身に、まことのこゝろはなけれども」……實に自分は無慚無愧の淺間しき者で、まことの心といふものは一寸も無い、當に慚愧せぬばかりで無く、自分が其の慚愧せねばならぬ者である事さへ氣づかずに居る無慚無愧の淺間しき者である。まことの心といふものは何處を尋ねても藥にし度くも無い。けれども「彌陀の廻向のみ名なれば、功德は十方にみちたまふ」である。此の南無阿彌陀佛一つは如來大悲の廣大御廻向の御親心の塊りである。此者を哀れと思召す如來の遣る瀧無き御心を賜る彌陀廻向の御名である。此の無慚無愧の此の者が、此の如來廣大の御廻向と頂けば、此の身は無慚無愧の身なれども、功德は十方に滿ち給ふ。實に廣大不可思議の功德が來て下さるのであると喜ばなされたのである。夫から次に又一首、

親の事でも、親の御恩は中々初めから分かるものではないのである。世間一般で言ふ時は、親の御恩の分らぬ者が、佛の御恩が分る筈が無い。先づ親の御恩を思ふて夫れから佛の御恩を思へといふのが世間普通に通言である。處が私共氣づかせて貰ふた結果から言ふと、中々然うは行かぬのである。親の御恩は如來の御恩が分らぬ間は決して分る事は無いのである。世間では親の御恩が知れぬ者が、佛の御恩が知れる筈は無いと言ふ。けれども、信仰上より言ふ時は、佛の御恩が分らぬ間は親の御恩は知れるもので無い。實は此の世の親の御恩と如來の御恩とを比べ物にして言ふて居るけれども、如來の御恩が分つて始めて親の御恩も知らせて貰へるのである。此の佛の御恩が分らぬ間は此世の親の御恩も、乃至生々世々の親の恩も決して分るものではない。けれども佛の御恩が知れると此の私が御恩知らずの親不孝者であつた事が分り、又生々世々の父母の御恩も、人から澤山の御恩を蒙つて居る事も知らせて貰へるのである。夫故親の御恩に事寄せて言ふけれども、頂き所は佛の御恩の外には無いのである。此の心持で聞いて頂きたいのであります。

夫に就き話が自分の親の事に反りますが、私が今に忘れぬ事故申しますと、私が西洋に行く昔の事でありませう。私が西洋に出掛ける時に私は思ふたのである。親が年よつてる故若し自分の不在中に親が亡くなるやうの事が有つては殘念故、西洋に行く事も一旦は止めやうかと思つたのである。併し思ひ反すとそんな事言つて居るのも畢竟凡夫の情に過ぎぬ、行く可き時には矢張り行く可きであると、斷然思ひ切つて出か

けたのであります。其の時から私は自分では相當に親思ひの積りて居たのである。斯る事も私には信仰上不思議な経験の一つ故、思ふ様に申しますと、私が西洋に行かうなどは小供の時には私は思ひも仕て居らぬ、そんな事は丸て身に入れた居無つたのである。處が私がまだ高等學校に居る時に親は言つた相である。若し私が西洋に行く時に、力が弱いから西洋人に侮られるといけない故柔道を習はせて置き度いと申したさうである。其の時私は別に行き度いと申して居らず、行く事を左程名譽とも思つて居らぬ。又行ける機会があるなど、は夢にも思つて居なかつたのである。諸方面そんな問題が起る可き筈なきに、親がこんな事を言つたに聞き、親は何んかと考へてそんな事を言つたものであるか。所謂親馬鹿で親はそんな事も思ふものであるかと、難有く思ふよりも寧ろ私は親の考えが調子は、づれてある事を聊かせ、ら笑ひの心持で迎えて居たのである。處が私が向ふに參つて二年程経つた時に一夜夜半ふと目が醒めて此事を思ひ出したのである。其の時は親が「つらぬ事を言ふと思つて居たが、今自分は現に西洋のベッドの中に寢て居る。さて親が言はれた其の話は不思議にも今事實になつて現はれて居ると氣が附いたのである。もつと詳しく申しますと、其の親の言つた事も、もう其の時は、しかとは覺えて居らぬ位、十年以來未だ此事は一度も思ひ出した事はなかつたのである。夫が不思議にも今思ひ出すと、ちやんと事實となつて現はれて居る。此の時私は何とも言へぬ感に打たれた。何事か知らぬが十年以前親の言はれた事が夢のやうに過ぎてゐる中に、今も、既にさうなつて居るでは無いか。

來た、もう親に會ふも數日の中である、して見ると茲迄歸つた事を別に親には知さいてもよいと、こんな横着な考を起して居たのである。併し友人が電報で知らすと言つたから、自分も一緒に知らしては置いた。處が其の電報が家に着いた時、父と母とが躍り上つて喜んで、いや自分に見せよ、いや私に見せよ、いや自分が人に知らす、いや私が知らすと父と母とが取り合ひをして恰も子供の喜ぶ如く家の周圍を追ひ駆け廻はつて喜んだと申すのである。私が京都に着いた時父が手紙をよこして諸根悦豫であると言つて來た。五官が悦びに満ち、身體中が嬉しいといふのである。私は一通の電報を親が夫程迄に喜んで呉れるとは思つて居らぬ。夫が如何に思つて居るか。平日相應に親を思つて居る、相當に親孝行はして居ると思つて居た我が心である。其の心を親が斯く迄此方を思つて下さる親心に比べると、實に何んとも申様が無い。自分は如何にも申譯の無い者である。廣大な親の御恩を受けながら、恩を恩とも思つて居らず、如何にも無慚無愧の甚しき者であつたと、親の親切で初めて我が身の申譯無き事が知らせて貰へたのである。即ち如來の廻向あればこそ自分の無慚無愧が分らせて貰へるのである。遣る瀬無き親心を聞かぬと自分が無慚無愧とも氣がつかぬ。遣る瀬無き如來廻向の親心を聞く時、初めて我が身の淺間しき事が氣づかせて貰へるのである。

從來私も『信仰の餘瀝』、親慈聖人の信仰』等に慚愧と感謝といふ言葉を用ひて置いた。併し茲は、一ついふと、廻向と慚愧と言つた方が善いやうである。如來廻向の親心が此方の心に届く一念に慚愧の心は起り來るのである。成程感謝と慚愧

之は彌々今自分が茲に居る事は佛の御恩、親の御恩に違はぬと氣がつくと、如何な横着の私ももう其の儘ベッドの上に横になつて居る譯には行かず、早速顔を洗ひ手を清めて佛前に謹みて經を上げたのである。丁度大經の初めより讀み初めて當雨珍妙華迄讀むともう夜が明け渡つたのである。夫から又いつもの如く大學に行かうと、其の心持で出掛けたのであります。夫から學校へ行つて歸つて來ると丁度日本から直ぐ歸れといふ電報が來て居たのである。如何にも前晩に親の言を十年振りて思ひ出し、如何にも我が身が現在斯くある事、親が子供の時言はれたは之であるかと、親に對して自分の罪深き事、佛の御恩を蔑に仕て居た事に氣附かせて貰ひ、謂はゞ充分満腹して居た矢先きであつたから、實は通常ならば即刻歸る決心も六かしかつたのであらうが、此時は即刻歸る事に決心して、歸つて來たのである。之は思ひ出す儘を申したのであります。

さて夫で先づ日本に歸る事になつた。歸るとすると親の所へ歸るの故有難いと飛んで歸る可き筈なのに、中々さうは思つて居らぬ。まだ之でも自分は親を思つて居る、親に對して柔順である、又日本の教界に對しても自分は相應に考をつけて居ると善い氣になつて歸つて來たのである。丁度長崎に着いた時である。自分は電報によつて歸つて來た事故出立の時出した手紙よりも自分の方が先きに着いて居る。勿論電報で其筋へは報知して置いたのであるが、家に居る親はまだ歸るか歸らぬか確かな事は知らずに居る。夫に此方はもう既に長崎に着いたのである。此の時私は思ふたのである。もう茲迄と言つても別に差支は無いのであるが、併し感謝は廻向に氣がついた處で始めて起り來るの故、先づ第一に廻向である。此方は罪が深いとも無慚無愧とも思つて居らぬ者、其者に親の親心を届けて下され、眼が醒めた處で初めて慚愧の心は起り來るのである。故に廻向が第一に難有いのである。

## 二

さて斯くの如く如來廻向の御力で我々初めて慚愧の心が起り來る事に氣づかせて貰つて見ると、何うも此の味ひは他力信仰上何處迄も行き渡つてある事に段々氣づかせて貰ふのであります。度々言ふ事なれども善導大師の『般舟讚』の初めに在る御言葉が矢張り此の意である。茲て之を頂くと實に有難い。曰く、

敬て一切往生の知識等に白さく、大に須く慚愧すべし、釋迦如來は實に是れ慈悲の父母なり、種々の方便をもて我等が無上の信心を發起せしめたまへり。

善導大師と申す方は今日の言葉で言へば、敬度の情の厚い方である。如來大悲の下に廣大の御恩を喜び自己の罪惡を深く懺悔なされた方である。敬て一切往生の知識等に白さく、知識といふは善知識である。自分は泣いて一切往生の善知識等に告白すると申されたのである。「大に須く慚愧すべし」——自分は實に慚愧に堪えぬ。釋迦如來は實に是れ慈悲の父母也云云」——自分に此の尊き有難き親心を知す爲めに釋迦如來は實に重々の御苦勞を下された。釋迦如來は實に慈悲の父母にて在しますと大師自身に告白なされた御言葉である。さて



私が此の文を頂いて、此度此眼の醒めた如く氣づかせて頂いた事は、釋迦彌陀は慈悲の父母とは常に誰も言ふ所であるけれども、此の御文の上には「はつきりさむを立て、一切往生の知識等に白さく、大に須く慚愧すべし」ときつぱり言うてある事を今迄は誰も見落して言うて居た事である。慈悲の父母とは常に言うて居たけれども、さて其の慈父母の廣大の御恩であつたか、遣る瀬無き深重の手廻はしてあつたかと氣のついた一念、「大に須く慚愧すべし」實に自分は罪の深い者であつたといふ此の一句を今迄割合に軽々と見過して居た事である。お互に佛の御手廻はしてある御恩であると口軽く言ふて居るが、此の御文を頂くと實に慚愧に堪えぬ事である。

さて段々御恩の事を話しますが、氣が附いて見ると茲の思召は『和讃』の中に「ちやんとあつたのである。即ち『善導大師讚』の中に、

釋迦彌陀は慈悲の父母、  
われらが無上の信心を、

種々に善巧方便し、  
發起せしめたまひけり。

とあつて、次に

真心徹到するひとは、  
金剛心なりければ、

三品の懺悔するひとは、  
ひとしと宗師はのたまへり。

次の和讃が「ちやんとあるのである。釋迦彌陀慈父母のお育てによりあり有難いと氣のついた一念に無上の信心を發起せしめ下さる。其の一念に「真心徹到する人は」である。如來廻向の御親心が此方の胸に届いて下されて、夫程迄の遣る瀬無き大慈大悲であつたかと眞に我が身に知られた時が真心徹到である。其の一念が「金剛心なりければ」である。今迄親

問題で、又頂くとすると御開山の一言一句の上にも溢れてある味ひである。餘り秩序を立て過る嫌ひはありますが、私氣が氣づかせて貰ふた有り丈けを話しますと、御開山聖人が御一代の間淨土眞宗といふ宗旨の上へ一番お喜びなされた事、斯く言ふと語弊が出て来るかも知れぬ。然らばお喜びなされた中心は何であるかと言ふに、此の如來廻向といふ事が御開山聖人御一代の喜びの中心となつて居るのである。故に『教行信證』では表紙をめくると直ぐ宣はく、

謹て淨土眞宗を按ずるに二種の廻向有り。一には往相二には還相、往相の廻向に就て眞實の教行信證有り。

御開山聖人の『教行信證』の御教化は往還二種の廻向、皆な共に如來廣大の御廻向であるとお知らせ下されたのである。遣る瀬無き佛のお恵みによりて茲迄私を引き出して下された、其如來廣大の御廻向といふ事が實に淨土眞宗の根本々義である。此の廻向一つをお知らせ下された阿彌陀佛本願の教え之が教である。其の本願を南無阿彌陀佛の一行で私にお見せ下され、難有いと頂く一念に信が来るのである。其の信が起ると證の佛のお淨土に往く。淨土に往くと還相廻向て再び此の世に出て来るのである。考えて見ると教行信證往還二種の廻向とあるけれども、約る處此の罪深き仕方無き私を飽迄救はんとある御親心の外には無い。其の親心を此方に差向けて下さる事が廻向である。此の親を親とも思はぬ者、此の淺間しき我が身の上に佛が遣る瀬無き親心を差向けて下さるといふ、茲一つを御開山聖人は御一代お喜びなされたのである。夫故聖人が教行信證と色々長くお書き下されてあるけれど

の御恩は充分知つて居ると思つて居た此の私に、思ひ掛け無くも向ふ様より眞の如來の大慈大悲の親心を知らせて下された時は、之迄親の御恩は知つて居るなど、何言うて居たのであるか、實に相濟まぬ事であつたと氣がついた一念が「金剛心なりければ、三品の懺悔するひと、云云」である。三品の懺悔とは『往生禮讚』にある如く、先づ上品の懺悔といふは身の毛孔の中より血を流し、眼の中より血を垂れて懺悔するが上品の懺悔である。中品の懺悔といふは全身の毛孔より汗を流し、眼の中より血を垂れて懺悔するが中品の懺悔である。又全身眞赤になり眼よりは熱涙を垂らして懺悔する者が下品の懺悔である。此等三品の懺悔の様はあるが、何れも立派な聖者が懺悔の様である。今如來の真心徹到して下されて我が身は無量劫來實に申譯の無い徒ら者であつたと氣がついた一念は、身より汗を流し眼より血を流すにはあらねども之等三品の懺悔する人と違はぬ。自分の淺間しい事、自分の罪惡深重なる事がしつかり自分の心に分つた一念は、全く之等三品の懺悔と等しいと示し下されたのである。形には色々夫等の事は出来ねども、其の徹到するに至つては全く以て一なのである。して見ると又先きなる『般舟讚』の御文に善導大師が「大に須く慚愧すべし」と言はれたと同様である。御開山聖人は今の和讃で善導大師の此の御言葉を直に三品の懺悔と御示し下されたのであります。

さて段々斯くの如く頂くと、此の廻向と慚愧といふ事が實に有難い味ひである事に彌々氣づかせて貰ふのである。此の問題は廣く言ふと實に如何程でも廣く言ふ事の出来る大きなも、一言一句として如來廻向の味ひで無い所は無。

之をもつと事分けてお話するならば、法然聖人は「南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本」と財布を此方へ投げ出して下された方である。處が御開山聖人は其の財布の口をあけて、茲には斯ういふ金があるぞ、茲には斯ういふ貴い物もあるぞ、之を自分も貰ふのであるぞと、恰も財布の中から一々拾ひ出すが如く、一の南無阿彌陀佛の中から、或は往還二種の廻向であるとか、或は教行信證といふ具合に、財布を廣げて一々お示し下されたのである。如來より下さる南無阿彌陀佛の入れ物の中には、夫等の功德が皆ちやんと具はつてある。さて我々が之を頂く所はと言へば斯く迄にして色々私をお恵み下さる其の遣る瀬無き御廻向の御親心、此の一つで頂くより外は無。廻向と言ふと何か六かしき事のやうであるけれども然らば無いのである。此の私が哀れてある、此の罪深き奴を助けてやり度い、此者に稱へさせる爲めには唯南無阿彌陀佛一つであると、南無阿彌陀佛の中に其の遣る瀬無き親心を込めさせられ、之が分ると此の世から攝取光中の日暮であるぞ、命畢れば本國に迎え取るのであるぞと、遣る瀬無き親心を常に私へ差向けて居て下さる。之が廻向なのである。つまり言ふと御開山聖人が淨土眞宗をお立て下されたも外は無。斯く色々貴い物があるのであるぞ、此程迄に心を込めて私に向うて居て下さるのであるぞ、此の我が親心を知らせ度い、といふ外に佛のお意はないのであるぞと、茲をお知らせ下されたが御開山聖人淨土眞宗の教であります。

さて斯くの如く如來廻向のお意を頂くと、茲に始めて自分が罪惡深重の塊りである事が知らせて貰へるのである。御開山聖人は自分の事を愚禿と仰せられた。何うかといふに、若し如來廻向が眞宗の骨目である、聖人一代の御教化が此の廻向の一言であるとするならば、其の如來廻向は誰が頂くのであるか。實に此の愚禿親鸞が頂くのであると知らせ下されたのである。如來のお慈悲に氣がつくと、己は實に慚愧の外は無い。御開山が愚禿と示し下された事を我々は夫程にも思はず過して居るのであるが、聖人が五年間御流罪にお遇ひあらせられた。今日の我々からいふと、此の御流罪といふ事が實に大さかさま事なのである。聖人は廣大のお慈悲に氣が附いて、自分も喜び人々も喜びを傳へてお出なされたのである。御師法然聖人の教を頂いて、ひたすらに之を喜んでお出なされたのである。其の聖人及び法然聖人が意外にも流罪にお遇ひなされた事故、當り前に言ふならば、實に『化身土卷』の主上臣下法に背き義に違し、忿を成し怨を結ぶ。

で、何うしても之は當り前への事では無いのである。去りながら其の流罪にお遇ひなされた聖人が、越後で長々御難儀あらせられて、さて何と仰せられたか。といふに實に此の時仰せられたお言葉が此の愚禿といふ言葉である。『歎異鈔』奥書の文には宣はく、

親鸞僧儀を改めて俗名を賜ふ。乃て僧に非ず俗に非ず、然る間禿の字を以て姓と爲て奏聞を經られ了んぬ。彼の御申狀今に外記應に納むと云云。流罪以後愚禿親鸞と書しめ給ふ也。

小悲もなければ、名利に人師を好むなり」て、人の上に立ちて話を爲るなど、實に無慚無愧の甚しきものであると懺悔なされたのである。御開山聖人は斯くの如く自分の罪深き事を懺悔なさるとなると實に譬へ様無く懺悔してお出なさるのである。茲を能く頂かせて貰はねばならぬ。

全體佛敎に於ては懺悔は極めて大切な事である。去りながら我々が一應自分で自分を省みする懺悔は、本當の懺悔では無い。處が我々が眞實如來の御親心に氣づかせて貰うて、自分は眞に取り所の無い者である、眞に罪惡の塊りであると腹底より知らせて貰ふた時は、實に是程有難い懺悔は無い。最初に申した『悲歎述懷和讃』は皆な是れ 人御自身の懺悔であります。其の中の二首は先きに申した如くである。又其の中の一首に、

小慈小悲もなき身にて、 有情利益はちもふまじ、  
如來の願船いまさずば、 苦海をいかてかわたるべき。  
小慈小悲も無き者が人に話して有情利益をするなど、そんな事が出来る筈が無い。茲は『歎異鈔』第四章に、  
慈悲に聖道淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふはものをあはれみかなしみはくむなり。しかれどもちもふまじごとくたすけとぐることはさめてありがたし。

とある所である。我々人を救ふなど、そんな事は到底出来ぬ。況んや小慈小悲も無き者が有情利益など、殆んど思ひも及ばぬのである。第一此の我が身自身が、如來のお慈悲に遇はなければ、救はれる事の出来なかつた身であつたのである。爾るに勿體無くも此の者をば特に可哀がり、此の淺間しき私

既に流罪の身となつて俗名を賜はつて見れば、僧でも無く俗でも無い。實に淺間しき禿の身であると、自分から斯く慚愧なされたのである。勅免の御請にも自ら此の禿の字を署して奏聞せられたと申すのである。今の『歎異鈔』の御文で見れば此の御請書は今猶ほ外記應に納まつてあるといふのである。

斯く聖人が愚禿々々と仰せられたは世間ていふ一應の謙遜の言葉では無い。如何にも自分は淺間しき愚禿であると、心から懺悔なされた御言葉が此の愚禿となつて現はれたのである。夫故『信卷』の終には、

悲しい哉愚禿禿、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず、耻づべし傷む可し。

僅か一言なれども是丈けの深いお心が籠めさせられてあるのである。親鸞自分の身を思つて見ると、實に愛欲名利の塊り極樂往生を更に嬉しいとも思はぬ。實に淺間しき親鸞が意であると懺悔なされたのである。又『和讃』の卷末には宣はく、  
よしあしの文字をもしらぬひとはみな、  
まことのこゝろなりけるを、  
善惡の字しりかほは、  
おぼそらごとのかたちなり、  
是非しらず、邪正もわかぬこのみなり、  
小慈小悲もなければ、  
名利に人師をこのむなり、

自ら懺悔して斯くは仰せられてあるのである。善し悪しも分ならず、是非邪正も分からぬ此の身である。此の者が「小慈

自身をば殊に哀はれと思召す如來廣大の御本願である。此本船の御船ましまさずば、「苦海をいかてか渡るべき」——我々は永久苦海に沈む以外に仕様の無い石ころの身の上である。其の私が何故救はれる事が出来るのであるか。實に如來本願の遣る瀬無き御船がましませばである。遣る瀬無き親心の廣大御船あればこそ、此の罪深き私が浮ばせて貰ふ事が出来るのである。段々斯くの如く頂くと、御開山聖人の淨土眞宗は、一方には如來廻向といふ丸々如來より與へて下さる廻向といふ事と、其の廻向に氣がつけば自分は實に愛欲名利の塊りであると知らせて貰ふ以外には無いといふ事が頂かれるのであります。

猶ほ進んで御開山聖人が如來廻向をお喜びなされた味ひになると、到底他の人の伺ひ及ばぬ處があるのである。事柄を申しますと御開山聖人が十九歳の時聖德太子の磯長の御廟に參詣せられて、「汝命根應十歳」の夢のお告をお受けなされて、茲に聖人が切實なる求道の動機が起つた。夫より廿九歳の御時六角堂救世菩薩のお告げて始めて法然聖人にお會ひなされ、選擇本願念佛の教へ、——如來の慈悲は破戒無戒の者、一善一行も保つ事の出来ぬ者、其者を見捨てず飽迄哀むといふ廣大本願の願心であると承つて、立ち所に他力攝取の旨趣を受得し給ひたのである。夫故聖人は此の愚禿の親鸞を能くも佛は見捨てず斯く迄導き下されたものであると佛の御手引き皇太子の御恩といふ事を非常に喜びなされたのである。親鸞自分の身を考へると僧ともつかず俗ともつかず、實に譯の分からぬ淺間しき身の上である。爾るに其者を是れ程

道に見捨て給はぬ廣大の御本願であるかと、茲のお喜びが中々一通りでは無いのである。『和讃』に

大慈救世聖德皇、

父のごとくにおはします、

大慈救世觀世音、

母のごとくにおはします。

聖德太子を御開山聖人が一心にお頂きなされる有様が見えるのである。又

聖德皇のあはれみて、

佛智不思議の誓願に、

すゝめいれしめたまひてぞ、

住正定聚の身となれる。

聖德太子が勧め入れしめ、導き下されたのであるとお喜びなさるゝのである。又

他力の信をえんひとは、

佛恩報ぜんためにとて、

如來二種の廻向を、

十方にひとしくひろむべし。

斯くの如く佛の廣大な往相の御廻向と、佛の境界より此世に顯はれて御導き下さる還相の御廻向と、此の二種の御廻向によりて喜ばせて貰うたのである。此の二種の御廻向は親鸞一人のみにあるのでは無くして、十方の衆生が皆同様に賜はつて居るのである。此事を御恩喜ぶ徴しには、十方の衆生に知らせ度いと告示下されたのである。其の外まだどれ丈でもある。

久遠劫よりこの世まで

あはれみましますしるしには、

佛智不思議につけしめて

善惡淨穢もなかりけり。

善人も惡人も綺麗な者も穢れたる者も、善惡淨穢の區別の無いのが如來の御本願である。此の度び誰れも彼れも皆な一様に此の本願喜ぶ身として頂く事、是れ實に久遠劫來哀み蒙れる徴してであると御喜びなされたのである。又

を聖人は人事には仰せられぬ。直ぐ自分の事に仰せられるのである。殊に阿闍世王入信の一段になると度々言ふ事なれども丁度今いふ慚愧の味ひである。阿闍世王が六人の臣下に色々聞いても安心が出来ぬ。最後に大醫者婆が来て言ふには、  
耆婆答て言く、善い哉善い哉、王罪を作ると雖も心に重悔を生じ、而も慚愧を懐けり。大王諸佛世尊常に是の言を説き給はく、二つの白法ありて能く衆生を救ふ。一には慚、二には愧なり。慚とは自ら罪を作らず、愧とは他を教て作さしめず。慚は内に自ら羞ぢ恥づ、愧とは發露して人に向ふ。慚とは人に羞づ、愧とは天に羞づ。是を慚愧と名く。無慚愧の者は名て人と爲さず、名て畜生と爲す。慚愧有るが故に則ち能く父母師長を恭敬す。慚愧有るが故に父母兄弟姉妹有る事を説く。善い哉大王具さに慚愧あり。王の言ふ所の如し、能く治する者無けん。

此の阿闍世王が慚愧の心を起す處が實に有難い頂き處である。王が昔の逆惡を想ひ起して深く慚愧の心を起した。其處へ耆婆が來た言ふには、大王今自分が惡いと氣がついて慚愧の心を起されたは何より善い。世の中には唯二つの道ありて能く救はれる。其の一つは慚、二つは愧である。慚とは自ら罪を作らぬ事、愧とは人を教へて罪を造らしめぬ事である。又慚とは内心に自ら羞ぢ、愧とは人に表はして悔ゆる事である。又慚とは人に耻ぢ、愧とは天に耻づる事である。此の慚愧無き者は名けて人と爲ぬ、名けて畜生とする。此の慚愧心あり、初めて人は救はれる。善い哉大王、王は今こそ慚愧の心を起された。如何にも王の言葉の如く助かる道は無いのであ

多生曠劫この世まで、 あはれみかふれるこの身なり、  
一心歸命たえずして、 奉讃ひまなくこのむべし。

聖德皇のおあはれみに、

護持養育たえずして、

如來二種の廻向に、

すゝめいれしめおはします。

斯くの如く如來二種の廻向に氣づ せて頂いた事、實に遣る瀬無き曠劫多生の御手引きであるとお喜びなされたのであります。

四

就きては今日は人生と廻向といふ茲の處を今少しお話申し度い。此の廻向といふ事を理屈や道理で考へると、分からぬ事になつて仕舞ふのである。何か特別の物を如來より頂く事のやうに考へ、頂かねばならぬと思ふと、如來廻向でなく、此方より如來へ廻向する事となつて仕舞ふのである。眞宗では如來廻向を行行者の方よりは不廻向と言つて、佛の方より此方へ廣大の親心を向けて下さる、色々御手廻はしつて遣る瀬無き如來のお心を此方へ届けて下さる、之が廻向なのである。恰も春雨のたまるが如く、私の心に御慈悲をつぎ込んで下さるのである。此の如來廻向に氣がつくと、今迄自分は實に罪深き者であつた、夫程如來の御恩を受けてる身が、御恩の深き事にも氣がつかず、實に五逆十惡の淺間しき者であつたと知らせて貰へるのである。御開山聖人が『信卷』で先程申した「悲しい哉愚禿鸞、愛欲の廣海に沈没し……耻づ可し、傷む可し」とあなたに懺悔せらるゝ言葉の下に、直ぐ引いてお出になるのは阿闍世王入信の事である。阿闍世王の十惡五逆

と。——又續けて、  
大王當に知るべし。迦毘羅城に淨飯王の子、姓は瞿曇氏、字は悉達多、師無くして覺悟せり。自然に阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。是れ佛世尊なり。金剛の智有まして普く衆生一切の惡罪を破し給ふ。若し能はずと言はゞ是の處は有り有ること無けん。大王如來の弟提婆達多有り。衆僧を破壊し佛身より血を出し、蓮華比丘尼を害す。三逆罪を作れり。如來爲めに種々の法要を説き給ふに、其の重罪をして尋ち微薄なることを得せしめたまふ。是の故に如來を大良醫と爲す。六師に非る也。大王一逆を作る者は則ち具に是の如きの一罪を受く。若し二逆罪を造らば則ち二倍ならん。五逆具ならば罪亦五倍ならん。大王今定て知んぬ、王の惡業必ず免るゝことを得ず。惟願くば大王速に佛の所に往き王へ。佛世尊を除きて餘は能く救ふこと無けん。我今汝を慰むが故に相勸めて導くなりと。  
大王今此の慚愧がある。如何にも王の言葉の如く免るゝ道は無い。唯佛世尊が此者を助けて下さるばかりであると言はれたのである。即ち先きの和讃に「無慚無愧のこの身にて、まことの心はなけれども、彌陀の廻向のみ名なれば、功德は十方にみちたまふ」——此の仕様の無きもの故此者を助けんとすの廣大の御廻向である。之を頂けと耆婆が申されたのである。茲が實に慚愧と廻向といふ味ひの有難い處である。さて耆婆が斯く勸めて居ると、忽ち空中に慚有つて言ふには  
爾の時大王是の語を聞き已つて心に怖懼を懷けり。身を擧て戰慄す。五體梓動して芭蕉樹の如し。仰て答て曰く、天

是れ誰とか爲ん、色像を現せずして而も但聲のみ有つていはく。大王吾は是れ汝が父頻沙羅羅なり。汝今當に耆婆が所説に隨ふべし、邪見六臣の言に隨ふ莫れと。

我れは是れ汝に殺された父頻婆沙羅羅と云はれたのである時に聞き已て悶絶す。地に踞れて身の瘡増劇して臭穢前よりも倍れり。冷葉を以て瘡を治療すと雖、瘡蒸つかはしく、毒熱但だ憎せども損ずる無し。

斯の如く阿闍世王は苦しんだ。其處へ耆婆は斯くの如く慚愧心を引き起せとすゝめたのである。

さて佛此の事を説き畢つて最後に『涅槃經』に如何に御示し下されてあるかといふに、茲が中々頂き處である。私は頃此の事を始終言うて居るのであります。佛が八十年一代御説法を終つて、さて彌々涅槃に入り給はんとする時、阿難を始め諸の弟子達が、如來滅を示す事何ぞ速かなる、願はくば今しばらく止り給へと請はれた。けれども佛は更に聞き入れ給はぬ。最後に如何に仰せられたかといふに、

善男子我が言ふ所の如し、阿闍世王の爲めに涅槃に入らず。今我涅槃に入らんとして外には一つも心配する事は無い。唯阿闍世王の有る爲め、自分は涅槃に入る事が出来ぬであると仰せられたのである。續けて、

是の如きの蜜義は汝末だ解すること能はず。何を以ての故に。我爲にと言ふは一切の凡夫なり。阿闍世は普く一切の五逆を造る者に及ぼす。又復、爲にといふは即ち是れ一切有爲の衆生なり。我終に無爲の衆生の爲に世に住せず。何を以ての故に。夫れ無爲は衆生に非るなり。阿闍世は即ち

若し如來世尊に遇はずは當に無量阿僧祇劫に於て大地獄に在て無量の苦を受くべし。我今佛を見たてまつる。是の見

佛の所得功德を以て衆生の煩惱悪心を破壊せしむ。云云。即ち未だ覺えの無い我が伊蘭子の心より、梅檀の無根の信が顯はれて下されたとも喜びなされたのである。之が即ち如來廻向であります。此方は佛とも法とも知らぬ者、決して慈悲に氣のつく筈の無い者である。然るに遣る瀬無き佛の御心が、向ふより種々に善巧方便して此方へ御心を届けて下さる。此の御廻向があればこそ、不思議なる哉我等が心の上に、あゝ有難いといふ一念が起り來るのである。此の罪惡の私を斯くも大悲の親様は見捨て、下さらぬ。此の罪深き私を斯くも見捨て、下さらぬのが御廻向である。此の親心一つが有難い。如來の御慈悲の深きにて我が身の罪の深きは知りぬべしである。如何に慈悲が廣大なかといふと、

彌陀の五劫思惟の願をよく案ずれば、ひとへに親鸞一人が爲めなりけり。さればそくばくの業をもちける身に、ありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ

である。「そくばくの業をもちける身にありけるを」の御一言は實に慚愧の言葉である。如何程御慈悲が廣大なかと言ふと、此のそくばくの業をもちける身にありけるを、助けんと思はれたちける本願である。我々は是程廣大の御廻向を頂きながら、「そくばくの業をもちける身にありけるを」の頂き様が足らぬ。併し茲を確かり頂くと夫程の罪惡深重がさつぱり氣にかゝらぬ様になつて仕舞ふのである。茲が實に頂き處

是れ煩惱等を具足せる者なり。云云。

其の阿闍世王の爲め涅槃に入らぬといふは、即ち一切有爲の衆生の爲めである。阿闍世王の如く一切の五逆十惡を造る者の爲に、涅槃に入らぬのであると示し下されたのである。茲が實に『涅槃經』の頂き處であります。『涅槃經』の説法は言ふ迄も無く泣き悲んで居る弟子達に向ひて

諸行は無常なり、是れ生滅の法なり、生滅滅し已れば、寂滅を樂みと爲す。

と示し下された處にある。其の涅槃は何かと言へば、

如來の色身は滅すと雖法身は常住にして變易あると無し。設ひ肉身は滅しても、法身は變る事が無いと知らせ下された。其の如來が猶ほ此世に居るは何の爲か。實に我阿闍世王の爲めに涅槃に入らず、否我等五逆十惡の衆生の爲めである。と示し下されたのである。斯くの如く釋尊は二千年の昔に於て此の私の爲めに心を向けて下され、今日迄此一人の私の爲めに觀そなはし知しめして下さるのである。之が即ち如來の遣る瀬無き御心である。『和讃』に「釋迦彌陀は慈悲の父母」とあるは茲を知らせ下されたのであります。

さて斯くの如き廣大の佛の御心が聞えた時、不思議なる哉、阿闍世王の心に信樂の一念が開發した。即ち

世尊我世間を見るに、伊蘭子より伊蘭樹を生ず。伊蘭より梅檀樹を生ずる者を見ず。我今始めて伊蘭子より梅檀樹を生ずるを見る。伊蘭子とは我が身是れ也。梅檀樹とは即ち是れ我が心無根の信也。無根とは我初めより如來を恭敬せんことを知らず、法僧を信せず、是を無根と名く。世尊我

である。蓮如上人は八十通の御文、一通毎に五逆十惡の惡人と仰せられた。蓮如上人が是程迄に仰せ下されたは一通りの事では無い。御開山が阿闍世は我等が事なるごとく知らせ下されたも茲である。もう此の已上に落ちやうの無き此の罪惡の私である。夫をば助けようとの御慈悲であれば、もう是程有難い事は無い。茲になると實に慈悲の極りてあります。

さて斯くの如く段々頂く時は、阿闍世王は實に我が身の上であつたのである。此の五逆十惡の私を助けようとの五劫永劫の御苦勞であつたのである。否な五劫永劫の御苦勞は此の五逆十惡の私が居ればこそである。此の御苦勞は他の者の爲めて無い。實に「親鸞一人が爲めなりけり」、私一人の爲めの御苦勞であつたかと頂く外は無いのであります。もう茲になると簡潔明了、一點々の打ち處は無い。此の恵みが眞に自分の上に知られると、此の味ひは一言一句の御教化の上にも顯はれてるのである。御開山の上で頂けば、『歎異鈔』の第九章の御教化が茲である。

念佛まうしさらへども踊躍歡喜のこころもろそかにさふらふこと、またいそぎ淨土へまいりたきこころのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんとさうしいれてさふらひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯圓房おなじこころにてありけり。……

即ち親鸞も亦此の不審があると、先づ自分の罪深き事を擧げて慚愧なされたのである。人間は如何にも罪惡の者であると、先づ罪の程を知らせ下されたのである。……よく案じみれば、天におどり地におどるほどによ

ろこぶべきことをよろこばぬにて、いよく往生は一定と  
おもひたまふべきなり。……

罪が深いのと、有難いのが一緒にたつて来る。よく案  
じみれば天に踊り地に躍る程に喜ぶべき事を喜ばぬにて」と  
は如何にも罪が深い事である。茲は喜ばいでもと軽く言うて  
は仕舞へぬ。天に踊り地に躍る程に喜ぶべきことを喜ばぬに  
て——實に天地に對し慚づ可き限りであると言はれたので  
ある。先きの阿闍世王の所の御文には「慚とは人に羞ぢ、愧  
とは天に羞づ」とある。御開山聖人の慚愧の御左訓には「テ  
ンニハツルコ、ロナシ、ヒトニハツルコ、ロナシトナリ」と  
ちやんとお示し下されてある。夫程に天に踊り地に躍り喜ぶ  
可き事を喜ばぬ。喜ばぬにて彌々我が身の罪の深き事は明了  
である。夫ならば罪が深いから助からぬかといふに「喜ばぬ  
にていよく往生は一定と思ひたまふべきなり」——實に「歎  
異鈔」の御教化には一言一句も浮いた御言葉は無い。我々は  
うつかりすると茲を形容の言葉に讀んで仕舞ふからいかぬ。  
實に此の世の親の喜びから言つても、親が私の事を天に踊り  
地に躍つて喜んで下さる。之を聞くと如何な邪見な私も親の  
御恩を喜ばずには居られ無い。こんな不孝な私を夫も親は色  
々御苦勞下されたのである。……喜ばぬにて彌々往生は一定  
と思ひ給ふべきなり」である。次に

……よろこぶべきことをおさへてよろこばせざるは煩  
惱の所爲なり。しかるに佛かねてしるしめてして煩惱具足の  
凡夫とおぼせられたることなれば、他力の悲願はかくのご

ときのわれらがためなりけりとしられていよくたのもし  
くおぼゆるなり。……

阿闍世とは自分の事とも氣がつかず、釋尊が『觀經』の道具に  
説かれたもの位に、そんな横着な考で居た此の私である。其  
の私が其の罪造りの親殺し、親を牢へ入れても構はぬ奴であ  
る事を佛豫てより知し召し下されてのお慈悲であると仰せ下  
さるのである。實に茲の一言は有難い處である。佛かねて其  
の煩惱具足の其者の居るのが可哀想である、喜ぶべき事を喜  
ばぬ其の罪深い奴の居るのが可哀想であると言つて下さる  
のである。其の廣大の親心が頂かれて見れば「他力の悲願は  
斯くの如きの我等が爲めなりけりと知られて、彌々たのもし  
く覺ゆるなり。」——此の彌々が一通りで無い。喜びの心の無  
いに就け、彌々此の者を見捨て、下さらぬ御慈悲と、罪が深  
ければ深き程、彌々確かに慈悲の程が頂かせて貰へるので  
ある。惱みが多ければ多いて増々御恩の程が知らせて貰へる  
のである。此の罪が深いと解るのが自分の心で解るので無い。  
御恩が高いと知れるのが、自分の心で知れるので無い。御恩  
も罪も皆な御廻向で知らせて貰へるのである。次に

……また淨土へいそぎまいりたきころのなくていそ  
か所勞のこともあれば、死なんずるやらんとこころぼそく  
おぼゆることも煩惱の所爲なり。久遠劫よりいまして流轉  
せる苦惱の舊里はすてがたく、未だむまれざる安養の淨土  
はこひしからずさふらふこと、まことによく煩惱の興  
盛にさふらふにこそ。……

私が西洋に行く時親の事を案じて出かけた位なら、親の事が

寝ても醒めても忘れぬ等、歸るとなれば飛んで歸つて來な  
ければならぬ等なのである。然るに如何にも人間の執着の深  
き、彌々となれば苦惱の舊里が中々捨て難い。實に淺間しさ  
の限りである。親が淨土に待つて下さると知りながらも、  
急ぎ淨土へ参り度き心は起らぬのである。之に就けても能く  
煩惱の興盛に候にこそである。

……なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきてちからな  
くしてをはるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎ  
まいりたきころなきものをことにあはれみたまふなり。  
これにつけてこそいよく大悲大願はたのもしく往生は決  
定と存じさふらへ。云云。

斯る罪深き私、斯る喜びの無き私である。けれども此の私  
いや／＼ながらも命終る時は彼の土へ連れて行つて下さると  
お知らせ下さるのである。實に有難い御教化であります。之  
を要するに眞宗の喜びは、此の如來御廻向の御恩一つである。  
此の御廻向によりて彌々自分の罪惡を知らせて貰ひ、慚愧さ  
せて貰ふ外は無いと知らせて下されたのであります。

さて斯く段々頂いて來る時は、此の如來廻向といふ事は實  
に一方ならぬ大きな事である。中々普通では頂ける事では無  
いのである。若し當り前より言へば如來廻向など、逆も出て  
來べき善が無い。然るに御開山聖人は此の廻向をあなた自身  
が頂いて、あなた自身が頂かれた御意より御示し下されたの  
が、此の如來廻向の宗旨である。此の眞宗の教は此の本願力  
廻向の外には無いのであります。夫れ故『御本書』には頭から  
本願力廻向でお初め下された。又の御文には、

若しは行、若しは信、一事として阿彌陀如來の清淨願心の  
廻向成就したまふ所に非ざること有ること無し。

貰ふ物と、貰ふ心と、共に佛より下されものである。親より  
下さる品物のみならず、夫を有難い受ける心迄親より御廻向

の御授けであるとお知らせ下されるのである。又

若しは因、若しは果、一事として阿彌陀如來の清淨願心の  
廻向成願したまふ所に非ざること有ること無し。

南無阿彌陀佛の如來御廻向の御念佛、之を頂いた如來御廻向  
の信心、其の信行具足して極樂に行く、其の極樂往生の結果  
迄が如來廻向の下されものである。其の極樂に行くこと、  
煩惱の林に遊んで神通を現じ、生死の藪に入つて應化を示  
す。

極樂に生れて衆生濟度に出て來る事の出來るのも  
若しは往、若しは還、一事として如來清淨願心の廻向成就  
したまふ所に非ざること有ること無し。

皆如來御廻向の賜物である。斯くの如く何から何迄九々如來  
廻向の恵みの中に包まれつゝある身である。其の恵みの中に  
居る我が身は何うかといふに、實に愛欲名利の塊りて、光明  
中に入れて頂き、正定聚の分人として貰ひながらも更に喜び  
もせず、まことに耻づ可し、傷むべしである。茲になると我  
が身は實に罪の極まり如來は慈悲の極まりである。罪深け  
れども恵みのお力極まり無きが故に、罪の深い事が更に障り  
とならぬ。恵みの深い事を思はせて貰へば貰ふ程、彌々我が身  
の罪深き事が能くは知られて、益々慚愧に堪えぬ次第である。  
『執持鈔』には宣はく、

是非しらず、邪正もわかぬこの身に、小慈小悲もなけれ  
ども、名利に人師をこのむなり。往生淨土の爲めにはたゞ  
信心をさすとす。そのほかをばかへりみざるなり。往生候  
どの一大事凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすぢに  
如來にまかせたてまつるべし。云云。

反す／＼も如來廻向の下に安心させて貰ひ、廣大の恵みを喜  
んで彌々自分の罪深き事を慚愧させて貰ふ。之が何よりの仕  
合せてあります。(三月廿六日)

聖傳

ジャータカ釋尊傳

久劫遠の昔

此如九つの比喩もて沙門の功德を默思しつ、賢きスメダは自身の家を開放して、先に述べしが如く巨萬の富を貧窮者、行路者、其他惱める人々に施しぬ。己は物質上精神上の總ての快樂を捨てアマラの市を立ち出て、世離れしヒマツアン州なるダムマカとよぶ山麓に庵を結びぬ。禪定に妨なき五欲離れし小屋を作り、巡行の堂をも建てたり。身心いと穩にひたすら人に超えし智力を得んと望みつ、彼は比丘生活を送りぬ。衣も十二の功德を供ふるてふ樹皮の衣にかへ、或時は小屋を出て、樹の根に座し、五穀を絶ちて、單に野生の果實のみをもて其身を養ひぬ。座しつ、立ちつ、歩みつ、あらゆる難行苦行を修するほどに一周日にして八勝道を獲たり、かつ五つの勝れたる能力をも得ぬ。

かく彼はちのが願の如く優れし智慧を得たり、故に曰く、我默思して、限りなき富をば人に施しつ

ヒマツンタにぞ趣むきぬ。

此處に眞近きダムマカの山に勝れし隱家の

受胎誕生成佛や

初めて金口開く時

起りし瑞相見ず聞かず。

其時ジバンカラ佛百千の聖者に伴はれ一所より一所へと彼の行程を経てラムマの地に達し、スマツサナの大僧院に居を占めたまへり。

ラムマ市の住民等は「ジバンカラなる比丘の長が優れし佛の大覺を成じ此上なき法をたて給ひ、諸處を巡行して遂に此處に來り給へり、今やスマツサナの大僧院におはすなり」と聞き傳へ云ひつぎぬ。人々牛酪乾酪其他藥物、衣服等をはじめ香物、花輪、其他の捧物を手にとりつ、彼等の赤心をあらはし、佛に詣て、此等を恭しく捧げ奉れり。かくて佛の説法し給ふを聞きし後、次日佛を招待し奉りて別を告げぬ。次日市民は貧者には施物をなし、佛を勸請し奉らんとて市を裝飾しぬ。道路を修繕し水に洗はれし土地を埋め、平にし、銀沙の如き砂をまきぬ。香ある根や花を撒布し、空高く五色の長旗短旗をひるがへし、バナ、のアーチを作り、水を漲したる水瓶を並べぬ。時に隱士スメダは彼の庵より下り空を歩みつゝ此等の人々の上に来て來りしが、歎ばしげの群を見て何のいはれにやと審しみ飛び下りて人に尋ねぬ。「何の爲に汝等は此の道を飾るや」と。

邊州に佛を請すべく

彼等は路を清めたり。

折しも我は隱家を

離れて硬き皮衣

さやかの小屋を結びけり、

此處に五欲を離れたる

脩道場をも建てにけり。

かくて八つの善果をえ

すぐれし智慧を有しけり。

世俗の衣脱ぎすて、

十二の功德をなふなる

木の皮衣まとひつゝ、

或は小屋を立ちいで、

十の利をなふ樹根にて

いたくも我は勵みたり。

こゝに五穀は斷ち果て、

自然の果物とるがまゝ、

立ちつ、歩みつ、座りつゝ、

遂に七日へしほどに

智慧の力を我は得ぬ。

かくの如く隱士スメダは優れし智慧の果を楽しみつゝいと

幸深く生活せしに、折しも大覺ジバンカラ出世し給ひぬ。

彼の母胎に入りし時、誕生の時、佛陀と成りたまひし時、及最初に獅子吼説法したまひし時、大千世界は一時に振震して大

音響を發し三十二の瑞相現はれたり。されどスメダは悟りの

三昧に入りて耳に其音を聞かず、眼に其相を見ざりき。曰く

我法樂に耽りつゝ、

ジバンカラなる大勝者

宇宙の大師出まして

摺りつゝ空に立ち出でぬ。

激しき群の嬉しげに

歎ばしげに居るを見て

我は地に下り人に問ふ。

人々歡喜に激しつゝ、

誰が爲にかく路清む。

時に人々は答へて曰く「主なるスメダよ汝は知らずや、ジバンカラ佛大覺を得て光榮ある法の國を立て給ひぬ。一所より一所に旅しつゝ我が都に着し給ひ、大僧院スマツサナに住み給ふ。我等は今大聖を請ぜんとして路を清むなり」と。比丘スメダもへらく「佛陀の其言の響は世に稀有なり、いはんや活ける出現をや、我等は彼等と共に路を清めんと。彼等に向ひて曰く、「若し汝等佛の爲に路を清めば、我にも此土地の一部を清めしめよ、我は汝と共に働かん」と、彼等は喜び諾ひぬ、人々は此比丘スメダはいと勝れし能力を有するをすればいと困難なる沼地をあてがひぬ。

スメダは心中佛の來り給ふ歎しさに胸も躍らん斗りなりき。おもへらく、我は勝れし力により土地を容易に修繕するをうべし、これどは我に満足と與へざるべし。今日我は人として出來うる限りの勞力を盡し、以て義務を果すべしとて、手もて土をつかみつゝ沼地を埋めぬ。いまだ彼の業成らぬに早くも六の勝れし智を供ふる神力自在の聖者等其數百千餘も來りぬ。天使は天の花環、香物等を捧げ天樂は響き渡り、人は此世の香物、花及さまざまの捧げ物を以て敬ひぬ。十力具足せるジバンカラは恰かも獅子がヅルミリン平原に餌を捕へんと奮起

せし如き超越せる威貌もて飾られし路に歩を進めぬ。時に隠士スメダは憶せぬ眼をもて佛陀の御容を見るに三十二相八十隨好の美もて端嚴に飾られ、一尋の後光輝き渡り、六色の光を放ち、其光互に映じて種々の光あり、恰かも天の穹窿に寶石をちりばめしが如く、雑色の光明まばゆきばかりなりき。叫びて曰く、我は佛陀の爲に犠牲となるべし、佛陀をして泥中を歩ましむる勿れ、否佛及び四百千餘の聖者をも玉ちりばめし樹の橋を渡るが如く我身體の上を歩ましめん。此行は我善と幸福の爲長く残るべし。と云ひつゝ髪をとぎ、墨の如き泥中に皮の上衣を擴げ樹皮の衣を身體にまき、玉の橋の如く泥中に伏しぬ。故に曰く、

我に問はれて彼答ふ。

「比なき佛世に出てぬ

ジバンカラなる勝利者は

宇宙の主なり、彼の爲

道をば清む、佛は今

此道にこそ來るらめ」

我佛の名を聞きし時

歡び體にあふれたり、

佛陀！佛陀とくりかへし

嬉しきあまり叫びつゝ、

歡喜に激し、立ちにけり。

此處に我若し種蒔かば

樂しき時は永久ならん、

汝等佛陀の踏み給ふ

天より下り、人々は

地に立ち、四方に空高く、

チャムバック、サラ、キヤダムバ華

メスア、ブンナガ、ケタカ、等

香華を散じ祝ひけり。

時に髪をば解き放ち

我は沼地に皮衣

投げてやすけく其上に、

面をふして横はり、

佛よ此上ふみたまへ、

君に沼地を歩ませし

やがて是身の幸ぞ。

彼かく泥に横りつゝ再びジバンカラ佛を憶せぬ眼もて眺めかく思ひぬ。若し我欲せば總ての欲を絶ちし後ラマの市に新發知として入るを得べし、されど我は何故に人欲を斷ちし後己のみ涅槃を求めざるや、我はジバンカラ佛の如く眞諦をきは、眞實の勝れし智慧に進み、人類をして眞實の船に乗せしめ、生死の大海を渡らしめん、かくの如く我人と共に涅槃に入らんと八つの事わけを觀じつゝ佛陀となる決心をなしぬ。

横たわりつゝ思ふ様

若し我此日人欲を

斷たば斷つべき身なれども

衆生をおきてなどわれは

まことの智慧に達すべき。

土地を清めば我も亦  
みあしのあとを清めてん。

時に彼等は我爲に

土地の一部を興へたり、

佛陀佛陀と叫びつゝ、

我は沼地をうづめたり、

されど我業成るさきに、

早や御佛は來ましけり、

大聖勝者はちのかごと

六のすぐれし性を得て

罪垢にそまぬ聖者たち

四百千餘も引き具せり。

四方に人々雲とわき、

大鼓は樂を送りたり、

人や天使は歡びつゝ

讚美の歌を唱しけり、

天使は人を人は亦

天使を眺め諸共に

諸手を高く組み合せ

大聖に近く差し上げぬ、

天使は天の音樂を

人は此世の音樂を

大聖に近く奏てけり、

天使は空の諸所に舞ひ

蓮華珊瑚の花びらは

願をたて、佛となり

人や天使を救ふべし、

なとて我のみ他をすて、

大海原を過ぎ行かん、

我は全智を獲得し

人や天使を度すべし。

我此發願によりてこそ

敗壞の流斷ちきりて

三身ともに棄てやりつゝ

眞の船に帆をあげて

人や天使を助けつゝ、

おのれと共に渡すべき。

時に慈悲あるジバンカラは其處に達しつゝ、隠士スメダの頭に近く立ち給ひぬ。恰も人寶石をちりばめし窓を明くる如く其五つの徳を供へたる眼をむけ、スメダが泥中に伏せるを認めぬ。おもへらく、「此處に横れる隠士は佛陀とならんとの菩提心を起せり、されど彼の願は成就すべきや否や」と。

佛未來微鑿力の眼ざしを投げて思へらく、「四アサンキヤヤス十萬シイクルの後、彼は瞿曇と云ふ佛陀たらん、其時カヒラバツの都は彼の住處となり、女后マヤは彼の母、王ストホダナ

は彼の父、主なる弟子はウバチツサ、第二の弟子はウツバラ  
ンナなるべし、彼智徳熟せし時、世を退隠して大苦勵を経、  
菩提樹下にミルクライスを受け、ネランジャヤーラの堤に於て  
是を喫し終り、大智の玉座を占め、無花果樹下に於て最勝の  
佛と成らん。

全世の大智ジバンカラ  
我が枕らする傍に立ち  
宜ふ御聲さこゆなり。  
比丘等よこゝに横たはる  
苦行の比丘を認めずや、  
數限りなき年を経て  
かれは此世に佛たらん。  
みよ！大靈は快き  
カピラをはなれ大戦を  
戦ひあへてアジャバラの  
樹の根に乳の粥をうけ  
ネランジャラ川下りゆき  
堤に座して喫すべし。  
彼はわがためしつらひし  
いと麗はしき路などり  
菩提樹下にてむかじより  
榮光あふれ比なき  
菩提の御座に禮しつゝ  
無花果樹下に佛をえん。  
かれを生むらん母の名は

マヤとよばぬ、父の名は  
スドホダナといひ、おのが名を  
瞿曇と名づく、ウバチツサや  
コリタは彼の主なる弟子、  
寂靜の智に住すなり。  
從者ナンダはあけくれに  
世尊につかへ奉る、  
キユーマ、ウツバラバンナ等は  
佛の女人の御弟子なり、  
あなしく無碍に穩に  
寂靜の智に住すなり。  
佛の聖樹はアツサナなり。  
隱士スメダは叫びぬ、我願は成就するらしと、幸福なる笑  
を洩しぬ。群集亦ジバンカラ佛の言葉を聞き歡喜しぬ。



讚 仰

蓮如上人の御文(二)

和田龍造

五帖目第一通

末代無智の在家止住の男女たらんともからは、こゝろをひとつにして阿彌陀  
佛をふかたのみまいらせて、さらに餘のかたへこゝろをふらず一心一向に  
佛たすけたまへとまうさん衆生なほ、たとひ罪業は深重なりとも、かならず  
彌陀如来はすくひましますべし。これすなはち第十八の念佛往生の誓願のこ  
ゝろなり。かくのごとく決定してのうへには、れてもさめてもいのちのあら  
んかぎりには稱名念佛すべきものなり。あなかしこ。

由來を明すに就て確定せる一説のみであれば之を説くもの  
も之を聞くものも殊に感深くする譯ではあるが、遠く年月  
を隔てたる歴史上のことは左様に参らぬが残念である。今日  
の其日〱の新聞紙でさへも、昨日起つたことを今日記載し  
て報道する新聞紙でさへも、種々間違あつたり異説あつたり  
することなれば、交通の不便なる文書器關の備らざる古昔の  
事蹟には異説の起るも無理からぬことである。「御文」の由來  
に就て確定せるものもあるが亦異説のあるものもある。確定せ  
るのは云ふまでもなく難有昔の事蹟を思ひ浮べて之を味はし  
て頂く次第である。異説のあるものは之を一列擧してみら

と、(一)には異説各々特殊の歸依信樂の姿ありて之を味ふこと  
が出來(二)には他日何らかの機縁によりて正説を知るのよすが  
ともなることである(三)には蓮如上人の「御文」はある因縁に唯  
一回御興へになつたと云ふのみでなくして、同一の「御文」を  
種々の因縁の場合に御興へになつたと云ふ事柄もあらうと思  
はるるのである。されば今此處には異説のあるときは皆之れ  
を掲げて味ひたいと思ふ、此「五帖目」一通に就ては二説ほど  
見うる次第である。  
頃は文明五年(一説には三年と云ふ)十一月二十八日(一本  
に二十九日とある)の未の刻であつた、福田の乗念寺當年の  
七晝夜の御法要も首尾よく御仕まいなされた御悦を申しあげ  
るために、蓮如上人の御前に進みなされた。當時上人は五十九  
歳にまし〱て越前國吉崎の御坊に御出てなされたのであ  
る。乗念寺はありがたき希有の信者にて、上人吉崎の御坊を  
御建立の始より何かと力を盡され、殊に毎年霜月の御法要七  
晝夜の間は萬事萬端周旋御取持いたされるのである。然るに  
老年のごとでもあれば當年を御暇乞と思ふたであらう。上人  
へ言上せられけるやうは、私當年は六十歳になりたれば今年  
が報恩講の御暇乞と存したてまつる、それにつき私も老體に  
なりて朝夕尊師の御そばにありて御給仕を申しあげ御教化を  
聽聞いたす事も出來かねる間、願くは御形見に一通の御文を  
賜らば御じ〱の御催促と存して、朝夕拜讀し御教化を聽  
聞仕り度くと御願になつた。其時上人快く御承諾ありて御認  
めになつたのが此一通である。上人御自身にもくりかえし  
〱二三遍も御獨吟なされ、さても貴とやと御落涙なされ福



田の乗念へ賜はりしと云ふことである。時に乗念寺は是を頂戴して歸られしが、それより四五日も過ぎて十二月四日に目出度往生せられたと云ふことである。(惠忍著『御文來意鈔』渥美契華著『末代無智御文説教』)

蓮如上人七十三歳長享元年八月二十四日に、足利義政將軍の管領細川勝元の幕下に山口次郎俱教といへる人ありて山科本願寺に參詣なされ、上人に御對面なされ御教化を蒙り機縁此處に熟して安心決定なされた事であるが、其時申しあげらるゝ様、今此亂世にして合戦止む時なければ何時武士のならひとして一命をすつるや計り難き事であれば、再び御對面を願ふて御教化を受くることも覺束なければ、願くは一通の法語を御染筆ありて賜らば常に懷中し折々拜讀し、直の御教化と存し稱名の助縁に仕り度しと願はれければ、上人領掌ましくてさらさら御書きになつたのが此一通である。俱教之を頂戴して大に喜び御禮を申しあげて退き、馬に乗り京都へ歸らんとして滋流谷越に來かかりし時、後より聲をかけ同く馬上にて追掛るものがあつた。誰ならんと後をみるに山名の家臣川邊の信恒である。時に信恒云ひけるは、御邊と我とは竹馬の友にて其交り兄弟もただならざることであるが、細川山名の兩家不和になりて合戦に及び、貴殿とも我とも敵味方と相分れ疎遠に打過ることの残念さよ、近き中又定めて合戦あらん、若し戰場にて御邊と我と出合ひなば親友なりとて容赦し玉ふ勿れ、花々しく合戦して運を天にまかせようではないか、かくせば武士たるものの面目も立ち、また一方の功績にもなることである、但し勝利者はなき親友のために出家となり

後に討死にせんと、東山の方に行きたるが頓に氣力盡きて歩行もかなわねば一庵室に入りて休息した。夜に入りて庵主をたのみて俱教を埋めし所にいきて讀經を願ひ、さて改めて云ふ様、自分は俱教との約束もあれば所詮助からぬ身なれば此處にて切腹すべければ、何卒御手数ながら同處に埋め玉へかし、亦此一通は山科上人の御文章にして俱教の守護にありて夜前異光を放ちたるものである、俱教は之によりて安心し我もまた之によりて安心したるものなれば、之を世にひろめて多くの人々を濟度し玉へと後事をたのみ、やがて切腹してはてられた。庵主は死骸を同處に埋め懇ろに讀經して歸られたが暫くは世を憚つて口外せなんだ、遙後此僧の如上の物語を聞いて人々奇異の思をなしたと云ふことである。されば此御文を放光の御文とも稱するとのことである。

一説に云く、此庵主は楠正成の後胤某と云ひける武士であるが、これより蓮如上人に歸依の志篤くして後堺に下りて上人の弟子となり楠圓爾と稱せられた、これ堺の慈光寺の開基にして堺三坊主の一入である、寺號も此放光の御文との關係を思ひ合さるゝことである。(御文來意鈔)

その二、佛たすけたまへ

我如來の大慈悲の至極たる第十八願の御いはれを在家無智の誰人にも分る様に御述なされたのが此末代無智の御文であるが、私此處に此御文の文々句々を解釋せんとする者ではな、唯其能歸の信相をのべて「こころをひとつにして、阿彌陀佛をふかくたのみまいらせて、さらに餘のかたへこころをふらず、一心一向に佛たすけたまへとまうさん衆生をば、た」とひ罪業は深重なりとも、かならず彌陀如來はすくひましますべし」とある御言葉に就て、私の味はさせて頂いた趣き

て亡き菩提を吊ふことにすれば義も立ち情も立つてはないか、我は此事を相談せんためにわざ／＼御邊を追ひ來れるなりと申されたが、其内心は我は今度の合戦には必ず討死する事であらうが、御邊はひとかどの功をも立て亦死せし親き友を思ふならば御跡を吊ひくれよと云ふのである。其時俱教云ふ様、戰場は私事に非れば花々しく刃を合せて武士の面目を損せぬ様にいたすであらう、されど今度の合戦には我は討死の覺悟であるが、唯今山科の上人の所に參じて懇なる阿彌陀如來本願の御いはれをきいて安心決定の身の上となつたことであれば、御邊も我なくなりしならば上人に參りて安心の教をさかれよ、然かれは聽て臨終の夕には淨土にて對面いたすであらうと。かくて馬首を回して相分れたが其後程なく長享元年九月一日二日に渡りて京都に大合戦あつたのである。然るに兩人は出合はなかつた。九月一日の夜川邊信恒東山の方にありて異光あるを認め、即ち不思議なるかなと思ふて其方向に進み行きし處、長樂寺の後の山に俱教は數ヶ所の深かてを蒙りて切腹して横はり、傍の樹枝に守囊をさげてあるがそれより異光を放つのである。そこで信恒守囊を開けてみれば血痕斑々たる一通の文章がはいりて居るのである、俱教臨終の際之をよみて如來の御慈悲をしのんだのもあらう。其文を讀み下せば末代無智の在家止住云々の御文章である。信恒は友の死に悲しくもあり亦尊くもありて、友の死骸を其地を掘りて埋めて歸りたが敵の事なれば口外はせなかつた。其翌日の合戦に信恒數ヶ所の深か手を負ひて心に思ふ様、俱教の嘗ての言もあれば山科の上人の處へ參りて御教化を受ての

を少しばかり讃仰せんと欲するものである。易行院法海の『改悔文講義』原本は三河國馬場村願正寺にあると云ふことであるに、どふぞたすけたまへと云ふときは願になる、左様なればたすけたまへと云ふときは信受になる、鎮西は願なる故、どふぞ助け玉への意なり、今家は信なるゆへに、左様なればたすけ玉への意なり、何卒と左様なればの添言を付て助け玉へを解せと申されたことであるが、誠に私の胸によくひびく解釋である。大慈悲の親はたのむものを其ままながらの御助けとある本願の勅命なれば、いらざる無用の自己の分別をすてて其ままなりてよりかかるとなりたのむなりの能歸の信相をあらはせば、左様なればたすけ玉へと云ふ具體的文字になるであらうと思ふ、空蕩々の信仰ではなくして助け下さる親様と助けらる此私との意識ありてしかも親様の本願の御慈悲を私の胸にひきかして下されたときの本願の信相はたすけ玉へである、たのむものをたすけんの本願の御喚聲は十切の曉天より私の胸にひびいてある、其御喚聲にさまたされた私の胸の共鳴は其ままのたすけ玉へとたのむてあつた、これ我が胸の信相の直寫である、私は過去に救はれてあつたのでもなく、未來臨終のとき救はれるのでもなく、聞其名號信心歡喜と親様の御喚聲の我胸に徹した現在唯今が信のとき救のときであつた。我は後生たすけ玉へとたのむと云ふ言葉の歴史的方面をあげて蓮如上人の御苦勞の程を感謝したてまつらんと思ふ。

『救修御傳』第十九卷の中に法然上人聖光房に仰せられて、「あの阿波介も佛たすけ給へ」ともひて南無阿彌陀佛と申す、

源空も佛だすけ給へとおもひて南無阿彌陀佛とこそ申せ、更に差別なきなり云々」とある。法然上人より親鸞聖人に御送りになつたと云ふ『興御書』の中に「常に申様に浄土宗の意は機は十方衆生、心は助け給へと思ふ計り、行は一念も十念も決定往生也、佛願に順するが故にと、相承する外に、全く別の法行も示しなまし」とある、助け給への御言葉は法然上人の常に御用ひの御言葉である。又たのひと云ふ言葉は浄土真宗にありては宗祖親鸞聖人以來代々御用ひなされてある。今其三四をあげて相承のさまを述ぶるに、先づ聖人は『高僧和讃』には「本師導師大師は、涅槃の廣業さしあきて、本願他力をたのみつつ、五濁の群生すすめしむ」とある。『正像末和讃』には「佛智うたかうつみふかし、この心おもひしるならば、くゆるころをむねとして、佛智の不思議をたのみべし」とある。自然法爾章の中に「南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもはぬを、自然とはまふすどききさふらふ」とある。『嘆異鈔』には「日頃のころをひさかへて、生かなふべからずとおもひて、もとのころをひさかへて、本願をたのみまいらするをこそ、回心とはまうしうらへ云々」とある。覺如上人の『敬曰文』には「そのおもひきをたづぬればたとひ四重五逆をつくれる悪人なりとも、たとひ五障三従のあかつきし女人なりとも、わかくに生れると、おもふところを念おこして、南無阿彌陀佛と、たのみたまつらば、かならず阿彌陀如来の御ひかりにて、そのころをさしをさめとりて、ながくすてずとちかひたまへり。われ

聖人の御流は、たのむ一念の處肝要なり、故にたのむと云ふことおぼ、代々あそばしおかれさうらへども、委く何とたのめと云ふことをしらざりき、然れば前々住上人の御代に、御文を御作り候て、雜行をすてて後生たすけたまへと、一心に彌陀をたのめと、あきらかにしらせられ候、然ば御再興の上人にてましますものなり。『御一代記聞書』(七十三)

行 誠 上 人

よの塵とおもひすて、もちらぬまはいとはれが  
たき花の下蔭。(花)  
昨日見し松のみどりの色かへて花になりゆくみ  
よし野のやま。(花漸盛)  
ふく風におとせぬにはの櫻ばな今日は長閑に見  
よとなるらむ。(静見花)  
こゝろなき嵐もふかず人もこず今日こそ花は見  
るべかりけれ。(同)  
みやこ人いざ来てを見よ斧のきの朽木のさくら  
今さかりなり。(山家花)  
たむくべきしきみにかへて櫻花たをらまほしく  
ささ出にけり。(同)  
山てらはうき世の風をよそにして花も塵にはま  
じらざりけり。(同)

その本願をたのむが故、かの御ちかひにまかせて、すでに三途のくるしみを、うしろになして浄土に生るべき身にさだまりぬ」と云ふてある。存覚上人は『女人往生聞書』に「しかるに阿彌陀佛の本願にあひたてまつりて、名號をとなへ弘誓をたのむが故、いたたまなざることぢんとき、女身を轉じて男子となり云々」とある。上來述べ來りた様に、本願他力をたのみつつと云ひ、佛智の不思議をたのみべしと云ひ、南無阿彌陀佛とたのませたまひてと云ひ、本願をたのみまいらすると云ひ、南無阿彌陀佛とたのみたてまつらばと云ひ、その本願をたのむが故と云ひ、名號をとなへ弘誓をたのむが故と云ふてある。たのむの言は祖師以來代々御用ひあそばされたので蓮如上人始めて御依用でないこと云ふことは既に御承知の如くである。そこで蓮如上人の御功績と云ふものは、信心安心と云へば愚癡無智のものはわかりかぬこともあるが、左様ならばたすけ玉へとたのむと云ふときは如何なるものでもたやすく具體的に信仰の内容を承知することが出来、これによりて安心決定した人の少なからざるは眞宗再興と云ふに依ても知らるることである。終りに『御一代記聞書』を引いて其意を明にして結局といたします。

告 白

今は唯本願の綱にすぢるばかり

生 沼 き ぐ 子

此程不可思議にも彌陀の本願を信じ、廣大な御慈悲を喜ぶ身の上になさせて頂きました事は、實に此上もない幸福とかぎりなく喜んで居り升。此度先生より告白をせよとの仰せ、誠にお恥しい事とは存じましたが御言葉に従ひこゝに懺悔をさせて頂きます。

實に過去を思ひ御慈悲深い御深切な親心を思ひますれば、皆今までの萬の出来事は私への御手廻し御心附けて御座いました。今が今まで我身の程をもしらず、我儘三昧に恥しい夢を見て長い間御心配をかけました。

私は生家も嫁しました家も共に禪宗なので、自然本願寺の方へは御参りさへも餘り致さなかつので御座いました。然し祖母が實家よりの御縁で御慈悲を喜ばれて居りましたので、未だ幼い頃はたまには母の膝にだかれては御聽門した事は覚えて居ります。其後はまるで御縁がなく打絶て過して終ひました。

一體私は虚弱な質故に父母の寵愛も又一増なので、片時も

傍をはなれた事はない程なので御座いましたのが、急に他家へ参る様になりましたので、親の膝元を別れますとたゞ心細くてだん／＼淋しい心になつて終ひました。すると間もなく父の死といふ不幸に遇つたのでつく／＼身にしみ、猶々變な性質が何につけても少しも満足は致しませんで、自分が隔心でありながら人のみ恨み、實にたよらない身と陰氣になつて人を困らせて居りました。其中レイキが出来まして二回も大學で施術を受けましたので、産後の疲や何にかて遂に名の付く病氣になりました。かゝる不幸にあひながらまだ不足のみ申、世を果んで泣いて居りました。兎に角轉地と申す事になりましたので、鎌倉の中でも極淋しい處を撰び子供を連れまして移りました處、母などはとてもそんな淋しい處では案じられるからと切りに申しましたが、とう／＼き／＼ま／＼としては寺々を廻つて居りました。丁度四年前の其時深くも禪を修し度いと念が起りました。そうして居ります中に一昨年暑又も産の後に種々心のもだへやら、主人の立取込みの爲め非常に身體が疲れてどつと床就ました。其中で主人は出船致しますし、醫者はとても此度の容體では三ヶ年の後歸朝の日までは六かしかろうとひとそかに母へ告げましたので、母の歎き兄の心盡しは實に身にしみ骨にこたへました。自分はどうかつても一度は安心をさせ、其上ならねばと勇氣が非常に出ました。此上はせめてもの事に御法縁に遇せ度いと母が情の導きにより秋の彼岸の頃近所にて物心覺を初めて御聽門致し、其時は只もう有難く涙にくれて居りました。

其後求道會の有るを知り、第二求道會にて「信は是義の本なり」と云ふ題にて「しようさん經」につき細々只御恵みばかりと云ふ事を御話し下されました時、嗚呼そうて有つたか今までの疑ひ一時に晴れ、最早あのころのと云ふて見る事は一つも無く、初めて夜の明けし如く、只此廣大なる御恵を喜ぶのみと、嬉しさ喜ばしさに飛び立つ思ひ、少しも早くと夢中て歸りました。其時の様子が今も笑話しに成つて居り升。實に私は浮ぶ事の出来ぬ極重の罪を持って居ります。役にも立ぬ病の身、親に對し子に向ひ萬づに對して、罪に罪を重ねて居ります。そのみならず人を疑ひ人を恨み、落るより外なき此私を遠い昔より憐み下され、切なる御心よりくだし給へる本願のつな、今は只すがり奉るより道はないと、眞實自力の心をふりすて、一心一向に彌陀を頼み参らす心となり、うき人生の苦しみも病になやむ其下より、日毎に浮ぶ御念佛、いよ／＼安心を得させて頂きました。此御恩は實に御禮の申上様もなく、誠に恐れ多い事では御座いますが、

曠劫多生のあひだにも、出離の強縁しらざりき  
 本師源空のまさずば、此の度むなくすきなまし。  
 此の御喜びの御心が如何にも有がたく、近角先生の御高恩佐藤師の御導き、いと深い御縁と只／＼御稱名御念佛の外は御座いませぬ。近頃私の様子が餘程變つたたと姑も、初めて廣大な御慈悲を喜ばれる様に成りました。病氣の方も思ひがけない結果に成りまして、醫者等は實に不思議幸福の中の幸福と驚いて初めて私へ話して呉れました。何にもかも、皆偏に佛様の御計で、何につけても御禮のみ、思ふ事とても拙い筆

日が重なるにつれ自分はどうかして禪の方で遂げ度いと思ひながら、病中實家に居りましたもの故に他の事も心にかゝり、鎌倉へ歸り種々考へて居りました時、玉耶經の御本を送られ拜見して居りますと、一々がまるて私の事の様に、實に自分も此日は私の誕生日なのでした。もう一日も早く道を求め度いと丁度姑も一所になりましたので私の快心を見てゆるし、兄も盡力致して来れますし、望みのかなふばかりになりなす。母が其れを聞きましてどうあつてもゆるして呉れませぬ。母は父の死と私の病氣が御縁にて深く信ずる様になりましたので、此尊い易行の道あるに弱い身體で自力等とは飛んでもないと、呼よせられ種々に申され、佐藤師よりまた細々御さとしを頂き、やつと思ひ止り一心に眞に他力の信を得度いと更に志し、それより毎月會の日には出京致す様に心掛け、御丹精を頂いて居りました。そうなりますと又此度は一日も早く信仰に入り度いと夢中になつて思ひつめ、有難き御本等を拜見致しますのをこよない楽しみとして一歳を過し、身體も大層快くなりました。

丁度昨年の十月二十五日の事で御座いました。計らずも佐藤師の御供を致し、大森の善友會にて初めて近角先生との御縁を結ばして頂きました。大層有難く講話を承り、終りますと何んともいふに云はれぬ晴れやかな心になりまして、喜びよろこび歸宅致しました。思ひまするに此日はどうしても深い御縁にて、たしかに佛様より引出して頂き、手強い御導きと眞に有がたく存しました。

や言葉にては申盡されません。私の様な不幸の病になやむ罪ある方、どうか此尊い御恵に御心つき遊ばすやう、申上ぐるもお恥しい愚な私の告白喜びの餘り御禮の中より。南無阿彌陀佛。

拜啓只今瓜生師の大經讀誦拜聴、静觀室にて筆を取り申候  
 一昨日は父三週忌追憶の爲御揮毫御惠送成被下、殊に何共申上難き難有佛語御認め被下如何にしぶとき薄情者の私も佛恩を思ひ感泣せず居られ不申候。殊に杉山法兄は墨を御磨り被下候由、不可思議の御因縁、佛恩の深重なる事を感謝致すばかりに候。南無阿彌陀佛  
 早速表装致し度存じ候へ共法事の間に合ひ不申、止事を不得其のま、佛間に掛け拜讀致させて頂き申候。昨夜は父上の御速夜に御座候間祖師の報恩講を兼り法座を開き申候。参詣人、内方併せて六十八人餘、にぎ／＼しく營なまして頂き、一時過ぎ迄喜びまして頂き候。  
 本朝は御命日の事に候得ば早朝より家内一同を佛前に禮拜、瀧下師導師正信偈和讃讀誦終りて二十三日拜受申上候先生の御書簡今朝開封申上る答にて佛前へ供へ居り候間、瀧下師に代讀を願ひ申上候。一字一句御親の心血ならざるはなく、父上在世の事共同想萬感胸に迫り初めより頭上り不申感泣仕のみにて有之候。此當時の心中は筆紙に盡し難く、何卒御推察願上候。家内一同も皆御恩の程感涙仕候。一々が御口より直ちに御教化蒙り居る様に相感じ御在席としか思はれず、瓜生師も左様に申候。一帯難有慚愧の情切なる今時に私程幸福者が又と世に有るかとの喜びは先生の言葉を頂くにつけ、さげばずに居られ不申、宿縁の深厚を喜ぶばかりに候。南無阿彌陀佛。  
 三月二十五日 有田 廣

時報

讚岐傳道

三月下旬は東京各所に於て法縁多くして寧日なく、病床危篤にして法悦する人、病全快して求道心切なるもの、家庭にして子弟に信仰を養はんとするもの、各自の信仰を告白せんとするもの、寺院にして門徒を教化せんとする者其縁無量なり、而して三月三日日曜の晩學舎の諸君に送られて出發、四日朝米原に着し、臺下の一行を迎え奉りて、長濱に到り、母上と相會し、午飯を共にし、對坐喜び極りなし、皆師恩也、相携へて別院に詣す、三郡の僧俗雲霞の如く集る、皆舊相識也、余亦部下の一人として臺下の御親教を拜聽して感尤も深し、今や正に讚岐に傳道して臺下駐錫の本旨信念振作にあることを述べんとするに當りて恰も親しく示教に接す、加之京都まで列車を同ふして其徳風に浴するを得たるは洵に不可思議の極、今昔を回憶して益々師徳の無盡を感謝すんばあらず。

五日朝高松に着す、脇屋氏及び青年會其他同朋の人々に迎えられ、直に木田郡高岡の願勝寺に到る、寺正に臺下を迎え奉る準備に忙殺せられつゝあるにも拘らず、特に法苑を開きて信念を振作せんとする熱心感ずべし、遠近相集る、つゝしみて自己が善知識に遇へるの喜を告白し、且つ本願力の遇へるの宿縁を感謝して、人々に對して此深厚の宿縁を空しく過す

べからざるを述べ、山川白山高等女學校校長鈴木喜三郎氏一家を始め年々同信の御同朋相集り、深夜に至るまで信仰談に余念なし、六日は太田村西法寺に開會御縁熟すること深し、夜半起ちて社説を認む、七日山田本念寺に移る、春風十里麥青く、菜花黄なり、特に昨日來の因縁深し、觀喜極なし、八日は山内村の長然寺に開會し九日は高松の福善寺に開會し、何れも御同朋法悦極なし、十日は丸尾氏の發起にて晝は山階にて夜は多度津にて十一日は鹽田氏兄弟の發起にて九龜にて開會し、十二日權堀にて開會し、西方指南鈔法然聖人臨終の行儀を拜誦して感謝極なし、事自督欄の如し、十三日神戸福間氏に來り花香春風坐に滿つるの間に欄筆す。南無阿彌陀佛。

加賀の橋爪屋甚右衛門曰く、私は頼む計りの御助けに聞いた上にも、まだ外にありがたき事もある様に存せられますからして、折り／＼ほどふか外を尋ねる様な心も起りますからして、さて／＼之れは勿體ないとおやまりはてし念佛を申しますが、如何で御承りますか。

謙師曰く、よく／＼思へば此の悪人が、念佛申す程有りがたいことは無い。唯へば駿河の富士山と加賀の白山と、一つ所へ寄り合ふ事あるとも悪人凡夫の兩手を合掌して念佛することは、まだ夫れよりも難い。そのものが手を合せ念佛する様になりた程有りがたいことは無い。依りて法然聖人の御言葉に、光明よりも紫雲よりも。昨日も今日も南無阿彌陀佛々々と稱へらるゝがありがたひと仰せられた、然れば念佛の稱へらるゝがありがたい最上なり。

（香月院語録）

近角常觀著書目録

親鸞聖人の信仰

本書は嘗て本誌に連載せる眞宗慶嘆に大訂正を加へて一書に纏めたるものなり。絶対他力信仰の大権化たる親鸞聖人一代の教證に對し、著者が平生抱懐せる渴仰、尊崇、憧憬の至情は本書に溢れて餘蘊無し。

冠頭 歎異鈔

此の「歎異鈔」は讀み易きよう字をまばらに補え、校正を嚴密になし、且つ冠頭を加へて諸聖教中より参照すべき要文を引用し、叮嚀懇切に作りたるものなり。

唯信 唯信鈔 文意鈔

「唯信鈔」は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして「唯信鈔文意」は聖人特に本鈔を尊信して、愚癡盲昧の我等が爲めに其文意を講授し給へるものなり。聖人に文意の著あるに見ても本鈔の他力信仰上如何に貴重の聖典たるかは知るに足らん。本所感ずる所ありて此の兩書を一冊にまとめて刊行す。冠頭を加へて参照用文を引用したる等凡て歎異鈔に同じ。同朋諸君幸に熟讀玩味して無上の法味に浴し給はん事とす。

懺悔錄 附錄 歎異鈔

本書は著者が實験の信仰に基づき、古來求道者の金料玉條たる「歎異鈔」の眞髓、惡人救濟の眞意を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歳以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と最後に佛陀攝取の慈光に接して人生の異聞頓に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舎城の悲劇に照し、又著者が實験を聞きて獄中大安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一途ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し之れ懺悔錄の名ある所以にして、一讀入信の人少からず。

第貳版 定價金七十錢 小包料八錢

第四版 定價五錢 郵稅四冊迄二錢 用部數に應じ充分割引す

新施 定價七錢 郵稅三冊迄二錢 用部數に應じ充分割引す

第六版 定價二十錢 郵稅貳錢 用部數に應じ充分割引す

東 京 市 區 森 町 一 番 一 號 求 道 發 行 所 申 込 所

△靈光第三年第二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二號及第四年第一、二號の残本あり、希望者は至急郵税共一部參錢の割にて御送金あれ▽

# 靈光

## ▲本社への御送金は

靈光は信仰修養の良指針にして家庭の好同伴なり。靈光第三年第八號より親鸞聖人御傳鈔講話を連載し其他金玉の文字を滿載す。り前田慧雲博士の

▲一部參錢郵税五厘▲半年貳拾錢▲一年參拾六錢郵税共▲見本は往復はがき申込者に呈す可成郵便貯金口座東京一〇五一〇靈光社(仁木信夫)宛にて御送金被下度最寄郵便局にて拂込用紙を請求せられ御送金額の外に口座料二錢を添付して拂込まれ度候該送金には爲替留料を要せずして紛失不着の憂なきのみならず郵便税なくして通信の出来る便法に有之候

明治己酉初夏、學徳ともに高く一世の師表と仰がる、前田博士が、佛世尊最後の遺訓を提げ、之を講ずること穩健真摯にして而も條理明晰法門の深奥を發揮し、淳々娓娓々、人の肺腑に徹せざれば止まざるの概ありき。

本書は右旬日に亘れる講演を筆録せるものにして、苟も佛の慈訓に浴せるもの宗派の如何を問はず、又僧たると俗たるとの別なく、俱に三讀せざるべからざるの良書なり。

製本既成◎前金者に發送中◎引換小包謝絶

# 佛遺教經講話

内容見本は往復はがき申込あれ  
菊版總ふりかな附 全一冊頗る美本  
定價金六拾錢 郵税八錢  
求道愛讀者へは 特價金五拾五錢 郵税八錢  
海外郵税共(四十仙)八拾錢

發行所 神戶市中山手通四丁目二番地 電話番號二五八三番

- 靈光社
- 生さんとする思想と
  - 生ささせて貰ふ思想
  - 内容の充實
  - 一味の信仰
  - 新舊所感
  - 新年雜吟
  - 梅
  - 慈善と云ふ事に就て
  - 我家の賑ひ
  - 年頭の所感
  - 其他
- 發行所
- 同 廣道勸商場内
  - 同 大阪南久太郎町
  - 同 同 麻布飯倉町
  - 同 東京本郷春木町
  - 同 賈捌所京都西六條
- 洗心書房 積江本店 森江書店 興教書院

# 道 光

第參年 第貳號 目次

- 法然上人の信仰
- 涙の谷(道友のたより)
- 王舎城の悲劇
- 讚佛歌(弘誓の御手)
- 人生問題の根本義
- 道光錄

一部六錢郵税五厘  
十部郵税共六十錢  
毎月二十五日發行

## 規 定

本誌は毎月一回十五日發行とす  
本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず  
本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事  
郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事  
凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし  
本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事  
回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事  
本誌定價左の如し

一 部	一ヶ月	六ヶ月	一 年	郵税一册
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

## 冠 安心決定鈔

一部郵税とも七錢  
但二册迄郵税貳錢

思ふに歎異鈔は親鸞聖人の信仰の肝腑にして安心決定鈔は逆如上人の信仰の眞髓なり。しからば求道の士絶對他力の堂奥に參せんとせば、二鈔を前後して拜誦すべきなり。

## 發行所

京都市黒門通下魚柳下ル愚禿房内  
京都求道會

## 發行所

發行兼編輯人 近角常觀  
印刷人 白土幸力  
東京市本郷區森川町一番地  
求道發行所  
(振替口座東京一六六九六番)

## 大賣捌所

東京市神田區表神保町  
東 京 堂

明治四十三年四月十二日印刷  
明治四十三年四月十五日發行

前號要目

◎信ずるほかに別の仔細なき也  
求道

◎慈父悲母  
白啓

◎本誓重願慮しからず  
講話  
近角常觀

◎蓮如上人の御文  
識仰  
和田龍造

告白

◎聞書

◎慈光の照護

◎重々の御導き  
時報

◎仰恩紀行

了信

尾野敏雄

宇野みね子